
三学年だよっ！BSAA学園！

龍の骨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三学年だよっ！ B S A A 学園！

【著者名】

ZZード

N7659S

【作者名】

龍の骨

【あらすじ】

金山企業が倒産して二ヶ月たち、零斗達は三学年になった。
しかし、零斗達の前に新たな敵が現る。

その名は『暗黒流星団』、目的は世界を闇に包む事である。
果たして零斗達は、無事世界を守り、卒業できるのか！？

二年A組の名簿（前書き）

一期のBSAA学園ーの始まりです。

まずは三年A組のクラス名簿です。

二年A組の名簿

担任 雪蓮 副担任 ジョッシュ・ストーン

『ゾンビゲームシリーズ B S A A学園!』

北郷零斗

バレット・フランケン

ライアン・ハート

アリス・エンバース

アレックス・ウェスカー（アックス）

朱愛

夕化

王原皇呀

『恋姫十無双』

北郷一刀

桃香

愛紗

鈴々

『祝福のカンパネラ』

レスター・メイクラフト

ミネット

カリーナ・ベルリッティ

チエルシー・アーコット

アニエス・ブーランジュ

『リリカルなのは』

高町なのは

フェイト・T・ハラオウン

ハ神はやて

ユーノ・スクライア（セカンドベガ）

エリオ・モンディアル

キヤロ・ル・ルシエ

『神無月の巫女』

来栖川姫子

コロナ

ネココ

『百花繚乱サムライガールズ』

徳川千（千姫）

『氣力少年ダイチ！俺と四人の探偵と氣力修行！』
リュウ・ダイチ

『ミルキィホームズ』

シャーロック・シェリンフォード

譲崎ネロ

エルキュール・バートン

コーデリア・グラウカ

『たけし伝説！クリスタルと三国志と超力パワー！』
竜崎たけし

メイメイ

『IS』
インフィニット・ストラトス

織斑一夏

篠ノ之簾

セシリ亞・オルコット
シャルロット・デュノア
ラウラ・ボーデヴィッヒ

『緋弾のアリア』

遠山キンジ

神崎・H・アリア

『アビリティバスターーズ』

鹿目タツヤ

美樹翔子

三十九 A組の名簿（後書き）

零斗

「次回はパワーアップしたマイティ真拳を『披露するぞ！』

一話！ クラスが変わつてカオス！春のハジケファイバー！（前書き）

零斗

「早速一話だ！」

フランケン

「そ、そうだな・・・」

大汗を流すフランケンであった。

一話！ クラスが変わつてカオス！春のハジケファーバー！

金山四天王が倒産して二ヶ月・・・・

BSAA学園は、クラス替えを発表し、生徒達はそれぞれ決められたクラスへ移動していた。

三年A組にて・・・・

零斗

「嬉しいでございま～す！」

三年A組に決まったのか、零斗は大喜びをしている。

アリス

「零斗とまた一緒にいられるなんて幸せ～」

好きな人と一緒のクラスになつたな・・・・

夕化

「一緒にクラスになつたな・・・・」

口口ナ

「IJの一年間に内に決着をつけましょ～」

ネ口口

「そうにゃーの」

夕化達は、零斗を巡つての火花を散らしていた。

正直近寄り難い。

フランケン

「はあ、零斗と一緒にか・・・・・」

一方フランケンは、疲れ氣味である。

フランケン

(でも、ハジケない零斗は零斗じゃないしな。悪くないかも)

内心では、喜んでいた。

姫子

「ライアンくん、一緒になれたね！」

ライアン

「あ、ああ・・・・・そうだな」

姫子に腕をしがみ付かれて少々困惑氣味のライアン。

「キャアアアア！」

女子の悲鳴がし、零斗達はそこに向いた。

「！」の変態一風穴開けるわよー。」

ツインテールの少女が、二丁のコルトガバメントで逃げている少年に撃つており、少年はそれをかわす。

「俺が何したって言つんだよ。」

「あんたー私の尻を触つたでしょー。」の変態ー。

「俺は変態じやないー。スケベだー。」

「べつひめ回せー。」

零斗達は、少女の所に駆けつける。

「おこおこおいおい、お前等喧嘩すんな。仲良くな

やんと少女は零斗達に振り向く。

「向かひしのよー。」の変態小僧が私の尻を触つたのよー。」

零斗は、その少年に向く。

その時、零斗は表情を変える。

零斗

「お前、まさか氣力少年ダイチかー?」

少年、ダイチは零斗の言葉を聞いて振り向き、表情を変える

ダイチ

「えーーあなたはマイティ真拳の伝承者ー。北郷零斗ー。」

零斗

「あとそれと?」

零斗は少女を向く。

零斗

「神崎・H・アリアか・・・・・」

「な、何で知ってるのよ!」

少女、アリアは驚くような顔をする。

零斗

「ダイチいへ」

ダイチ

「零斗わあへん!」

ダイチと零斗は、互に向かっていく。

零斗

「ダイチいへ」

ダイチ

「零斗わあへん!」

ダイチは間合いで近付くと飛んでひねり、零斗の肩に乗り、腕を広げる。

零斗 ダイチ

「「ドッキング完了!」」

フランケン

「何の—————...?」

零斗とダイチにツツコむフランケン。

アリア

「あんた達何なのよ!...?」

零斗 ダイチ

「俺達はー東京タワーー!」

アリア

「意味分からぬわよー...?」

ダイチと零斗の意味分からぬ発言にツツコむアリア。

ダイチは零斗から降りる。

零斗

「よし、アックスと朱愛は・・・」

零斗はアックスと朱愛を探す。

右を見ると、アックスと朱愛がいぢやいぢやしていた。

アックス

「朱愛~一緒にクラスになれたね~」

朱愛

「アツクス様、私は嬉しいです」

雰囲気は桃色状態だった。

一 夏

「何か、カオスな予感になりそつだな……」

零斗達を見て大汗を流す一夏。

篇

「関わるな一夏、感染するぞ」

セシリ亞

「そうですね、金山企業を倒産させたとはいえ、ふざけているの
に変わりはありませんわ」

鈴音

「そうね～、特にムカつくのは、あたしと同じ姿勢をした朱愛ね」

そう言って零斗達を見る一夏達であった。

ダイチはどうしているかといつと・・・・・

下に巨大なフルーツヨーグルトがあり、飛び降り台に魚の着ぐるみ
を着たダイチがいた。

その着ぐるみは、魚の臭いがある。

ヨーグルトの中のフルーツ達は慌てている。

ダイチ

「今、フランスでは、魚ヨーグルトは、大ブレイク中であります。」

フルーツ達

「そんな訳無い！そんな訳無い！」

フランケン

「やめろよー！フルーツとハーモニーが出来無いでー！」

ダイチを止めようとするフランケン。

ダイチ

「では、いきまーす！」

そしてヨーグルトへ飛び込み、フルーツ達は逃げていぐ。

魚の着ぐるみを着たダイチはヨーグルトの中に入った。

しかし、強烈な臭いが出来る。

ダイチ

「台無しには、なりませんでした」

フランケン

「なつてるから・・・」

？？？

「」

何かの叫び声に、零斗達は向ぐ。

それは、頭以外棒人間になつている劉備ガンダムとシャルロットとラウラだった。

劉備ガンダム シャルロット ラウラ

「 「 「 やあ 「 「 「

零斗

「ああ――――――――!」

零斗はそんな三人に驚く。

一夏

「ええ――――――――!まさかの感染者!―?」

一夏は驚き、筹とセシリ亞と鈴音は驚ざめる。

キンジ

「う、うわあ・・・・・」

これを見たキンジも驚ざめる。

ダイチ

「「」飯の仇い――――――!」

如意棒を持つて訳が分からぬ発言をしたダイチにぶつけられ、気絶する。

アリア

「キンジい――――――!」

キンジがダイチにやられた事により、叫ぶアリア。

たけし

「おおー！すげえ！BSAA学園はこんなこといつたのかー！」

メイメイ

「すごいねー！すごいねー！」

零斗達を見て興奮するたけしとメイメイ。

たけし

「俺も仲間に入れてくれえー…………！」

たけしはスター・ライザーを取り出し、メイメイはサークル『ディフェンサー』を取り出して零斗達の方へ行く。

ダイチは後ろからたけしが来る事に気付き、如意棒でたけしの斬撃を受け止める。

そしてたけしとダイチが打ち合つつ。

一 夏

「おい、やめろって！教室がメチャクチャになるだろー。」

シャロ

「いや～凄い事になつてますね～」

ネロ

「いや、おかしいだろ？」

Hリー

「何だか、楽しく感じました～」

Hーテリア

「Hのまま続いてほし〜」

Hリーの後ろには、皿を光らせたダイチがいる。

ダイチ

「Hリー、わあ我とまぐわうわー...」

Hリー

「そ、そんな！ダメだよダイチ君」

そしてダイチは、Hリーの服を脱がそつとする。

ダイチ

「良いではないか～良いではないか～」

Hリー

「あ～れえ～」

もうみんなHリーはノリノリである。

シャロ

「Hリーさんだけあることあります～

Hーテリア

「私達も脱がせなさい！」

シャロとゴーデリアはダイチの所へ行く。

文
口

ダイチ達にツツ「むネロであつた。

その向こうで見てているのは達は・・・・・

なのは

フ
エ
イ
ト

学校が壊れちゃうぞ」と教室といふのが懶くと

なのはとフライテは責めるが、はやては何故か和んだ顔をしている。

はやて

「いや、和むわ」

なのは
フュイト

え！？あれが！？」

はやての発言で驚くのはヒュイト。

元

「俺もハジケるぞお——！」

一刀はふんどし姿で零斗達の方へ行く。

桃香

「主人様待て」

愛紗

鈴々

行二のた

後から一刀についていく桃香達。

千姪

あんた達いい加減にしなさいよお――――――――――――――!

しごれを切らした千姫が、薙刀を持って零斗達に向かっていく。

するとメイメイがサークルディフェンサーで千姫の薙刀を防ぐ。

千姫

邪魔よ！」

メイメイ

「攻撃するの良くないね！」

そして二人は、睨み合う。

二
ノ

「ふふふ、春休み開けにクラス替えになつた結果がこれが、悪くな

い。人間はハジケる事によつて成長し、強くなる」

そんなわけありません。

구
ノ

「この一年間、どれだけハジけるか、この僕が見てあげよう」

そう呟きながら零斗達を見るユーノであつた。

夕化

「喰うこなさあ——い——い——」

卷五

ב' - י' - ז'

夕化蓮は、互いに武器扱い會ひでない。

フランケン

—
•
•
•
•
•
•
•
—

そしてフランケンは、黒いオーラを出しながら震えている。

ライアン
「ん? アバー

「？」姫子

ライアンは危険を察知したが、姫子は気付いていない。

ライアン

「遂にフランケンが怒るぞ……」

姫子

「え？ 怒るの？」

ライアン

「耳をふさげ」

姫子

「え？ 分かった」

二人は耳栓をする。

フランケン

「いい加減にしろお

零斗達がふざけ過ぎた所為か、フランケンは怒りを露にしながら叫び、零斗達は静まった。

零斗

「ふ、フランケン？」

フランケン

「皆、廊下について来て……」

静かに言いながら零斗達を廊下に連れ、正座をさせた。

フランケン

「みんなクラス替えをしてからふざけ過ぎだよ！ 明後日は入学式だつていうの」セー・真面目にやつてよ。」

フランケンの怒声に、全員ビクッと驚く。

零斗

「そのあ～何でいつか～出来心だったんですね～」

フランケン

「出来心！？ それで済むと思つたら大間違いだよ。」

零斗はしゅんとする。

第

「ちょっと待てー。シャルロッテとリカはともかく、私達はふざけてないぞ！」

セシリア

「そうですねー。みんなのおかしいですわー。」

鈴音

「ふざけてない人にこいつの事をさせるのどうかしてるわよー。」

フランケン

「だったら止めるべきだろー！ 止めなかつた君達も同罪だよ。」

そしてフランケンに驚く篝達であった。

フランケン

「全く！教室に戻るよ。」

教室に戻らうとするが、隣を見ると、無数のリッカーがいた。

フランケン

「バイオハザードのクリーチャーが何でいるの…………！」

その原因は……

離里の帽子が蓋のよじて開いており、そこからリッカーが生まれたところ。

フランケン

「あんたかい……-----！」

劉備ガンダム

「さあ、この人があなた達のママよ～」

女装をした劉備ガンダムが、生まれたてのリッカー達にフランケンがママと云々事を教える。

リッカー達はフランケンに群がる。

リッカー1

「ママーママーマー！」

これによつてフランケンは怒りに震える。

リツカ一2

「お母ちゃん」

フランケン

「もう！ふざけないでって言つてるだろお！—皆大嫌いだあ——

フランケンの叫びが、学園中に響いたという。

そして零斗達は、雷が直撃するほどダメージを受ける。

『ラブ&ピース』第一話『平和』

時は幕末！

フランケン

「これ時代劇なの！？」

山の木の下で、零斗と女装をした劉備ガンダムがいた。

零斗

「お前のせいで、嫌われちゃつただろ?」

劉備ガンダム

「あなたのせいでしょう？」

零斗

「お前だろ？」

劉備ガンダム

「あなたでしょ？」

そう言い合つて十分経過した。

零斗

「明日一人で謝りに行こう」

劉備ガンダム

「そうね」

そして二人はフランケンの所へ行く。

零斗 劉備ガンダム

「ゴメーヌ」

これを聞いたフランケンは少し青ざめる。

フランケン

「いや、別にいいけど……」

その後、零斗達は教室に戻り、席に着いた。

そして教室の前の扉が開き、一人の教師が現れた。

これに驚く零斗達。

雪蓮

「今日から三年A組の担任になりました、雪蓮で～す！」

ジョッショ

「そして副担任の、ジョッショ・ストーンです」

「ひして三年A組の一年間が、始まりはじめていた。

一話！ クラスが変わつてカオス！ 春のハジケファーバー！（後書き）

フランケン

「新しいマイティ真拳なんて無かつたぞ！」

零斗

「あ、 いっけね。 忘れてた」

フランケン

「バカかあ——————！」

零斗

「次回は遂に新たな敵登場！ そして俺の新しいマイティ真拳の技を見せてやるぜ！」

「話！ 入学式に敵登場！？その名は・・・暗黒流星団（前書き）

「話題です！」

そして零斗が・・・・・

一話！入学式に敵登場！？その名は・・・暗黒流星団

入学式当日・・・・・

三年A組の教室では、ショートホームルームでジョッショウの話があった。

ジョッショウ

「今日は新入生を迎える入学式なので、昨日の練習を思い出し、緊張感を持つようにしましょう」

生徒達

「はい！」

ジョッショウ

「他に質問は？」

すると後ろの席の一人の手が上がる。

ジョッショウ

「え～零斗君」

手を上げたのは零斗だった。

零斗

「新入生の一人がハジケたら、俺ハジケていいいですか？」

ジョッショウ

「ダメです」

すると零斗はすつゝかる。

ジョッショ

「まあ、入学式が終わるまでハジケちゃダメですよ」

生徒達

「ダメだろー？」

ジョッショのボケに、生徒達はツツコむ。

ジョッショ

「以上、私の話でした。では、入学式では緊張感を持つよ！」

ジョッショは教室から出る。

その後、生徒達は教室から出て並ぶ。

零斗

「入学式かあ～何と言つか懐かしい感じがするし、新入生おめでた
いって感じだよね～」

フランケン

「そうだな」

アリス

「でも、私達は卒業生になるんだし、新入生を明るく迎えよつよー。」

零斗

「そうだな」

体育館に着き、生徒達はそれぞれクラスが指定されている椅子に座る。

とある遺跡では・・・・・

石で作られた棺桶らしき物が並んでいる。

だがその棺桶の内五つの棺桶が闇のオーラを放ち、蓋が震える。

棺桶が開き、中から人や怪人らしき物が出てくる。

一人は白い服を着ており、一夏に似ている少年。

もう一人は、クワガタに似た怪人である。

そしてツインテールで魔装少女の衣装姿と日本刀を持った少女。

右目に眼帯をしており、学生服姿と長刀にも見える大鎌を持った少女。

最後は全身が銀色で腹に『丹田エンジン』という機械が組み込まれている人造人間。

? ? ?

「今、世界を闇に包む時・・・・・行こう・・・・・・

少年達は闇のオーラに包まれ、遺跡から出て空を飛ぶ。

その頃、BSAA学園では・・・・・

ウェスカー

「新入生の皆さん、どんな困難でも立ち向かい、頑張って行きましょう。以上、私からの話でした」

理事長であるウェスカーの話が終わつたところだった。

零斗

（いよいよ新入生代表の言葉か……それにしても、何か近付いてくるような気がする）

零斗は何かの危険を感じていた。

そして新入生代表の言葉が始まる。

その時だつた・・・・・・

グランドから何かの爆発音がし、生徒達はざわめいた。

フランケン

「な、何だあ！？」

零斗

「やつぱりな！俺の嫌な予感が当たつてたぜー！」

一刀

「それより、生徒達を避難させないと」

零斗

「そうだな、キンジ！アリア！生徒達を避難させろー！新入生も含め

「てな

キンジ

「おひー！」

アリア

「分かったわー！」

キンジとアリアは、新入生を含む生徒達を、避難場所へ誘導させる。

BSAA学園の避難場所は、男子寮の側にある地下に続く階段である。

フランケン

「零斗はまだいるのー?」

零斗

「俺はグランドへ行くぜー！」

一刀

「おい待てよー！」

アリス

「待つてよーー！」

零斗はすぐにグランドへ向かい、後からフランケン達も行く。

しかしフランケン達は零斗に止められ、避難場所へ行った。

グランドに着き、零斗は白いオーラを出す。

砂煙が晴れると、零斗は驚嘆する顔をする。

？？？

「この世界を、闇に包む」

？？？2

「今の時代には、欲望が沢山ありそうだな」

？？？3

「百年ぶりだな・・・・・・

？？？4

「・・・・・・・・

？？？5

「ふふふふ・・・・

謎の五人組は、黒いオーラを放つ。

零斗

「誰だテメエらは！」

すると五人組はゆっくり歩く。

？？？

「僕の名はテル・・・・

？？？2

「俺はウヴァー」

？？？3

「私はN.O.・15のセス」

？？？4

「私は京子」

？？？5

「柳生義仙・・・・」

テル

「僕達は、暗黒流星団!」

そしてテル達は、黒いオーラを再び放つ。

零斗

「い、こいつら・・・・・・ヤベホぞ!」

そしてテルは、ゆっくり零斗に近付く。

零斗

「な、何だ!?」

零斗の近くで止まり、前蹴りをする。

前蹴りをされた零斗は、10m吹き飛んだ。

零斗

「ま、前蹴りだけで・・・・・」

腹を抑えながら立ち上がる。

テル

「安心しろ、本氣を出していい……」

零斗

「あれが？チートじゃねえか」

そして零斗は構え、白いオーラを放つ。

零斗

「マイティ真拳奥義！」

しかし、技を出す暇も無く、フックで5m吹っ飛ぶ。

零斗

「！」はあ……

そして零斗は、壁に叩きつけられる。

義仙

「ふふふふ、テル様はどこぞの人間と違つて超人ですよ」

京子

「あ～ら、金山企業を滅ぼしたマイティ真拳使いが、こんな程度だつたなんて」

ウヴァ

「失望したぜ」

セス

「弱者だな」

義仙達は笑う。

零斗

「何て強さだ・・・・・バ力強い・・・・・」

そしてテルは、零斗の首を掴む。

零斗

「うう、ああ・・・・・」

テル

「かつて僕と互角だつた初代マイティ真拳使いとは大違いだ。しかし今になつてからは弱くなつてゐる」

テルは零斗を地面に叩きつけ、体育館へ投げる。

零斗はうまく受身を取る。

零斗

「神聖なるマイティ真拳を侮辱するのか！？」

テル

「今　のマイティ真拳は、お前が百代目の伝承者になつてからは弱くなつてゐると言つてゐる」

零斗

「テメエ！」

怒りを露にして、白いオーラを出す。

「貴様には、マイティ真拳を使う資格は無い」
テル

「資格が無いだと…？」
零斗

「知らなかつたか？マイティ真拳の本当の恐ろしさを…・・・」
テル

「何つ！？」
零斗

「だが、教えない」
テル

テルは零斗の間合いに入り、膝蹴りをする。

零斗は吐血し、腹を抑えて倒れる。

テル

「弱いな、貴様は弱すぎる！」

倒れている零斗を一階の教室を田掛けて蹴り飛ばす。

教室の窓が割れると同時に、並んでいた机が乱れる。

零斗

「ぐ、うう・・・」

大きなダメージを受けながらも立ち上がり、白いオーラを出す。

零斗

「ま、マイティ真拳奥義・・・・・・」

背中から赤い翼が生え、零斗は助走をつけて教室から飛びぶ。

零斗

「フュニックスの翼！」

そして零斗は空中を飛び回る。

零斗

(空中戦なら、奴も不利だ。だつたら奇襲攻撃には弱いはず・・・・・)

そう思っていた零斗だが・・・・・

テル

「甘じよ?」

後ろを振り向くと、テルがいつの間にいた。

零斗

「何つ!?

テルは身体を捻らせて回転し、蹴り落とす。

蹴り落とされた事により、地面に呑みつけられる。

零斗

「うう、いつてえ・・・・チートか？？？百年前の奴ってこんなにチートだったのか！？」

テルは浮きながら零斗を見下ろす。

テル

「貴様の考えはお見通しだ」

零斗

「お前等、強すぎ・・・・」

テル

「トドメと行くか・・・・」

テルの手から黒い塊が浮き、黒いオーラを吸い取つて大きくなる。

テル

「百代目マイティ真拳伝承者よ、闇に葬れ・・・・」

そして黒い塊を投げ、零斗は目を閉じる。

その時、炎に包まれた矢が黒い塊を貫き、爆発する。

零斗は隣を見ると、炎に包まれた弓を持った少年がいた。

その少年は・・・・

? ? ?

「オジタアリフレイドの使い手」

零斗

タツヤ！ やめろ！ お前ではすぐやられるぞ！」

タリト

力アホな俺は死ない」

そしてタツヤは、テルに攻撃を仕掛ける。

テルは防ぐが、少しダメージを受ける。

テル

タツヤはテルの隙を探すように攻撃し続ける。

テル

テルは振りほどくようにバックハンドブローで吹き飛ばし、タツヤはうまく受身を取る。

タツヤ

「くつーお前、強そうだな」

テ
ル

「ほお、貴様もやるな」

互いに睨み合つ一人。

その時・・・・・・

フランケン

「零斗お――――――――!――!」

避難していた筈の三年A組の生徒達が現れ、零斗の所へ駆けつける。

テル

「チツ引き上げるぞ！」

テル達は黒いオーラを放ち、空へ飛んだ。

フランケン

「零斗！何なんだ！？」

フランケンは空に光つてゐる五つの黒い光を見る。

セシリ亞

「ああ！ボロボロになつてますわ！」

セシリ亞はボロボロになつた零斗を見て驚く。

しかし、零斗は氣絶している。

フランケン

「誰か！手を貸してくれ」

こうして零斗は、フランケンと一緒に保健室へ運ばれた。

その頃、暗黒流星団は・・・・・

ウ
ヴ
ア

「良いのか？トドメを刺せば、世界を闇に包む事が出来るはずだ」

元
ル

「うう、言葉を慎め」

セス

「ですが良いのですか？」

「すぐに殺すのはつまらない。零斗が強くなるまで、僕は待つ」
テル

テル達は、アフリカ方面に飛んでいった。

BSA学園の保健室では
・
・
・
・
・

零斗

「ん、んん、何だ？」

氣絶していた零斗は、ようやく目覚めたところだった。

アリスは零斗が目覚め、抱きつく。

零斗

「アリス・・・・・」

アリス

「良かつたよお～良かつたよお～

アリスは涙を流す。

零斗

（俺は確かに百代目伝承者だ。でも弱くなつてこらつてこらのせど
ういつ事なんだ？）

そつ疑問に抱く零斗であった。

一話！ 入学式に敵登場！？その名は・・・暗黒流星団（後書き）

フランケン

「ちょっとー新しいマイティ真拳を出すどいじのが零斗敗北したよ！？」

すみません、そうしたかったのですが・・・・・・

フランケン

「おーい——————！」

皇牙

「次回はある転校生が来るぞ。そして零斗が仲間と暗黒流星団に向けて特訓！？」

!!話一 秘密の特訓！？謎の転校生現る。（前書き）

今回はウザヴァのキャラが壊れます。

そして爆発王さん、本編がまだ連載中であるため、爆発王さんのキャラの登場はしばらく先になると思います。

申し訳ありません！

三話！ 秘密の特訓！？謎の転校生現る。

B S A A 学園の三年A組にて · · · ·

零斗はチラシらしき紙を見ていた。

フランケン

「零斗、何を見てるんだい？」

フランケンはその紙を見る。

その紙は、『世界武闘大会』と書いてあつたチラシである。

これを見たフランケンは言葉を失う。

零斗

「今度、俺はこの大会を出るんだ。奴等を倒す為に」

フランケン

「零斗、こくらなんでも無謀過ぎだよー」

零斗

「どういう事？」

フランケン

「世界武闘大会といつのは、世界の強豪が集う武闘大会だよー零斗
じゃ一回戦で負けるよー」

零斗

「一回戦で？馬鹿を言つなよ。日本武闘大会で優勝したこの俺が、負ける訳ねえだろ」

フランケン

「日本の武闘家よりも強いんだよ！？」

零斗が持つてているチラシに、『主催地 イギリストーマの闘技場』と書いてあった。

零斗

「イギリスのローマか、確かルッキーが生まれた国だったな」

フランケン

「え！？まさか」

零斗

「多分だと思うが、ルッキーも参加するんじゃないかと思つ

これを聞いたフランケンは言葉を失う。

零斗

「それか観戦かもしれないな」

フランケン

「だよね、ストライクウェイツチーズとはいえ、武闘家に敵つかどうかわからないし」

零斗

「そうだな」

するとアリスがやって来る。

アリス

「零斗、なに見てるの？」

そしてアリスは武闘大会のチラシを見た。

アリス

「零斗、武闘大会に出るの？」

零斗

「ああ～出るぜ。開催するのは夏休みが始まつてからだ」

アリス

「でも～強い人ばかりでしょ？」

零斗

「修行すれば、世界に通用するかも知れないぜ」

アリス

「零斗、頑張つて！」

零斗とアリスは盛り上がっているが、フランケンは取り残されてい
る気分になっていた。

フランケン

(何だかつ、零斗とアリスを見てると寂しく寂しく感じじる)

チャイムが鳴り、零斗達は席に着き、雪蓮とジョッショウが入つてく
る。

ライアン

「起立、気を付け、礼」

ライアンの命令で、挨拶をする。

ライアンが「着席」といつと、全員座る。

雪蓮

「今日は、転校生が来ます」

アックス

「先生、その転校生はどんな人ですか？」

雪蓮

「それはお楽しみに」

アリア

「先生、その転校生はキンジを狙いますか？」

愛紗

「先生、その転校生は昆布を好みますか？」

これを見たフランケンは少し驚く。

フランケン

(えー？愛紗まさかのキャラ崩壊！？)

雪蓮

「皆落ち着いて。では、どうぞ～」

教室に入ってきたのは、緑色のシャーティアの青年である。

青年は黒板に自分の名前を書く。

青年

「風見ソウスケです。よろしくお願いします」

雪蓮

「はい、ソウスケ君は神奈川の『ソード&ガン学園』から転校したんですよ~」

これを聞いた生徒達はざわめく。

キンジ

「ソード&ガン学園って剣と銃専門の高等学校の・・・」

一夏

「けど最近では、黒い噂が絶えないとか・・・」

アリア

「昔は評判が良いのに」

雪蓮

「眞さん静かに、ソウスケ君はこの学園で一年間いたと過ごします。仲良くしてあげてね」

こつしてH.Rが終わり、一時間目の授業後の休み時間になつた。

ソウスケは席に座つてこる零斗に寄る。

ソウスケ

「やあ、北郷零斗君だよね」

零斗

「ああ、そうだが?」

ソウスケ

「やっぱーーー金山企業を倒産させたマイティ真拳使いの零斗だ!」

零斗

「全国で有名になつたな。俺」

ソウスケ

「君、確かあの暗黒流星団といつ奴等に完膚なきまでやられたんでしょう?」

零斗

「なんで知つてんだ?」

ソウスケ

「BSAA学園に、僕の知り合いがいるんだ。その人から聞いた」

零斗

「それで、笑いに来たのか?」

ソウスケ

「とんでもない。暗黒流星団に匹敵する程強くなれるかを教えよう」とね

これを聞いた零斗は、驚愕する。

零斗

「強くなる方法だと？」

ソウスケ

「確かに戦士達の聖地『バトルグランド』で修行すれば暗黒流星団と互角になるほど強くなれるよ」

零斗

「へえ～そのバトルグランドっていう場所は？」

ソウスケ

「放課後教えてあげるよ。玄関に来てね」

零斗

「おう……」

チャイムがなり、生徒達は席に着く。

こうして時間が過ぎ、放課後になった。

ソウスケは玄関で零斗を待つている。

ソウスケ

「あっ、零斗君」

やつて来たのは、零斗とフランケンとアリストと一刀と皇咲とたけしとダイチとタツヤである。

零斗

「すまねえなソウスケ。フランケン達がどうしても行きたいとかいつてさあ～」

ソウスケ

「大丈夫だよ。皆で一緒にに行けば楽しいし。あ、クラスの皆には内緒だよ」

零斗

「分かってるって」

そして校門を出て、歩く零斗達であった。

その頃、暗黒流星団では・・・

黒い鉄仮面に黒装束を着た戦闘員達がテルにひかえている。

テル

「何? 零斗達がバトルグランドに向かってる?」

影星

「そのよつでござります」

影星2

「どうやら我らテル様に匹敵する程の力を手に入れようとしている可能性が高いです」

テル

「そつか、報告はこれだけか?」

影星

「はつ！」

テル

「ウヴァー！」

テルが掛け声をすると、ウヴァーがやって来た。

ウヴァ

「お呼びか？」

テル

「影星達を率いてバトルグランドに行け。零斗達より先回りをしろ」

ウヴァ

「先回りか。承知したぜ」

そしてウヴァーと影星達はその場で消える。

その頃、零斗達は・・・

零斗

「おおー！こいがバトルグランドー！」

目の前には、アスレチックや武術を鍛練する人達等があつた。

フランケン

「東京タワーの地下にこんな特訓場所があつたなんて」

タツヤ

「これは燃えてきたぜー！」

たけし

「そうだな、暗黒流星団に向けて特訓しなきゃ」

ダイチ

「腕が唸るぜー！」

たけしとタツヤとダイチはウズウズしていた。

一刀

「さて、行くか」

皇呀

「そうだな」

フランケン

「ちょっと待つてよー・ビー・ヒー・?」

一刀

「決まつてんだろ」

皇呀

「自分に合った特訓部屋へ行くんだよ

フランケン

「でも場所分かるのー!?」

ソウスケ

「大丈夫だよ

ソウスケはそう言つが、零斗達は散つて行つた。

フランケン

(なんか、不安……)

これを見てフランケンは、不安に思つのであつた。

ダイチは……

ダイチ

「さあ、来いや！」

飛んでくる野球のボールを弾く槍術、棒術専用のステージ『槍と棒の森林』で如意棒を持つて構えていた。

四方からボールが大量に飛んでくる。

ダイチはそのボールを弾く。

たけしと一刀は……

たけし

「一刀さん、よろしくお願ひします！」

一刀

「言われなくとも

地面から出でてくる丸太を剣で斬る剣専用のステージ『剣の鍛練洞窟』で一刀は日本刀を構え、たけしはスターライザーを構えていた。

地面から丸太が出てきた時、一刀とたけしは斬る。

斬つた丸太は地面に引っ込み、今度は斬つた丸太より太い丸太が出てくる。

このステージは、出てくる丸太を斬ればその丸太より太い丸太が出てくる。

斬れば斬るほど太くなり、難易度が高くなる。

アリスは・・・

アリス
「よーっし！ いくよー！」

放つてくる矢を二つの剣で弾く双剣専用のステージ『双剣の江戸』で二つの日本刀を構えていた。

矢が放ち、アリスは日本刀で弾く。

アリス
「すごい。これ為になるよ！」

皇呀とタツヤは・・・

皇呀

「・・・」

タツヤ

「かかって来いよーーーーー！」

向かってくる胴着を着たロボットを倒す無手専用のステージ『無手道場』で構えていた。

ロボット達は皇呀とタツヤにかかるが、一体ずつ倒されていく。

フランケンは・・・

フランケン

「うわあ・・・」

浮いている風船を突いて割るレイピア使い専用の『レイピアの風船遊園地』でレイピアを構えていた。

フランケンは浮いている風船をすかさず割る。

零斗は・・・

零斗

「くつーこいつは強いぜーー！」

バーチャルメガネを使って自分にあった対戦相手と戦うステージ『バーチャル都市』で『DOG DAYS』のシンク・イズミと戦っていた。

バーチャルなので、喋らない。

零斗

(ぐつーせっぱりテルのレベルに設定しても俺がぶつ飛ばされるの

(か)

そしてシンクの攻撃をかわしながら考える零斗であった。

零斗

(俺の弱点さえ見つかれば勝てるような・・・弱点?)

零斗はテルとの戦いを思い出し、シンクの攻撃を防ぐ。

零斗

(弱点・・・弱点・・・はっ! 分かったぞ!)

シンクの棒を弾き、後ろ回し蹴りをする。

零斗

(どうやら弱点があつたようだ)

シンクは棒を零斗にぶつけるが、防がれる。

零斗

(防御技が少ないって事が! 攻撃こそ最大の防御だが、相手より早く攻撃をされそうな時の防御技が無きゃダメだということか)

自分の弱点に気付いた零斗は、シンクを押し返す。

零斗は白いオーラを出して構える。

零斗

「あいべー・マイティ 真拳奥義!」

拳を地面にぶつけ、地面から土の壁が出てくる。

シンクの攻撃は、土の壁によつて防がれた。

零斗

「これぞ防御技！土壁シールド！」

土の壁はバラバラになり、零斗はシンクへ走る。

零斗

「マイティ真拳カウンター奥義！！！サマーソルトエクスプローション！！！」

三連続のサマーソルトキックを喰らわせ、シンクは氣絶する。

零斗はバー・チャルメガネを外す。

零斗

「これで弱点は克服された。暗黒流星団が来てもおかしくない」

こうして零斗は、バー・チャル都市から出る。

中央広場でフランケン達と合流し、帰る準備をする。

ソウスケ

「どうだつた？バトルグランドで特訓した気分は

零斗

「為になつたぜ」

フランケン

「俺もだ。簡単そうに見えたけど凄く大変だったよ」

一刀

「我流マイティ真拳が強くなつた感じだ」

ソウスケ

「良かつた～それじゃあ帰ろ?」

零斗

「そうだな、暗黒流星団が明日来たら、俺達で・・・」

???

「暗黒流星団が何だつて?」

零斗達は後ろを振り向くと、緑色のジャンパーを着た青年があり、零斗達に近付く。

零斗

「お前、一人か?」

青年

「一人だけだと思つが?」

青年は右手を上げると、鉤爪を持った影星達が現れ、零斗達を囲む。

そして青年はウヴァとなる。

青年
「全く」

零斗

「お前、一体・・・・・」

ウヴァ

「俺は暗黒流星団の幹部、ウヴァ」

零斗

「ウヴァ？ ああ俺達の学園に襲撃してきたテルと一緒にいた怪人か」

ウヴァ

「お前達、俺達に匹敵する程特訓していったよつだな。その特訓の成果を見せてもらおうか？」

ウヴァの念図で影星達は零斗達にかかる。

零斗

「見せてやる。特訓の成果をな！」

零斗は向かってくる影星達を一人ずつ倒し、後ろから襲いかかる影星を投げ飛ばす。

たけし

「はっ！ やあ！ とりやあ！」

たけしはスターライザーで鉤爪攻撃を防ぎ、押し返して斬っている。

たけし

「さあ行くぜ！ 秘剣！ 超力ライザー！」

超力ライザーで五人の影星がやられる。

影星達

「おお-----！」

一刀

「我流マイティ真拳奥義、大紅蓮斬！-----！」

刀を炎に纏わせ、吹き飛ばす。

アリス

「おりやおりやおりや-----！」

ダイチ

「はいはいはいはいはい-----！」

アリスは二つの日本刀で斬り、ダイチは如意棒で吹き飛ばしていた。

ダイチ

「うひょ-----奴等が飛んでくるボールだと思えば怖くねえな
！」

アリス

「飛んでくる矢を弾くという感覚を忘れなければ大丈夫だね！」

タツヤ

「オラオラ火傷すつぞ！」

タツヤはマイティフレームを用いて戦っていた。

皇呀

「破天荒真拳奥義！獅子猛突拳！－！－！」

皇呀は無数の突きを影星達を浴びせる。

零斗達の戦いを見ているウヴァーは・・・

ウヴァー

「これが成果か、くだらない」

影星達は全滅してしまい、零斗はウヴァーに近付く。

零斗

「ウヴァー、どうだ？これが俺達の成果だ」

ウヴァー

「それで勝つたつもりか？」

零斗

「残念だが、お前を倒して暗黒流星団を潰すー。」

無数のパンチを放ち、ウヴァーはそれを弾く。

そして回し蹴りをし、ウヴァーは防ぐ。

零斗

「へえやるじやん

ウヴァー

「これぐらい当然だもん

角から緑色の電気を放ち、零斗はその場から離れる。

零斗

「電氣か」

ウヴァ

「俺の電氣は当たると死ぬぞ」

零斗

「そうかい！」

そして零斗はウヴァの攻撃をかわし、手首を掴んで投げ飛ばす。

ウヴァはなんとか受け身を取る。

ウヴァ

「バカだな。間合いだ」

零斗

「それがどうした！」

ウヴァは角から電気を放ち、零斗は直撃し、痺れて倒れる。

ウヴァ

「今の電氣はスタンガンより弱めだ」

零斗

(ぐつ、あの角をなんとかしないと……)

痺れながらもなんとか立ち上がる。

零斗

(いりなりや 一か八かでやるしかねえ)

白いオーラを出し、構える。

ウヴァ

「何だ！？」

零斗

「マイティ真拳奥義いー！」

そして高く飛び、右手が赤く光出し、その状態でウヴァの角を切り落とす。

ウヴァ

「ギャアアアアアアアア！俺の角があ——————！」

零斗

「赤いチヨップの彗星、赤チヨップマン！」

角を切り落とされたウヴァは落ちた角を拾つ。

零斗

「どうだ？ 分かったら？」

ウヴァ

「北郷零斗一角の恨み、会つたときこは晴らしてやる。」

そう捨て台詞を言い、黒いオーラに包まれて消える。

ソウスケは零斗達に駆けつける。

ソウスケ

「大丈夫かい？」

零斗

「ああ、大丈夫だ」

ソウスケ

「良かつた」

こうしてバトルグランドから出てそれぞれ帰宅していった。

おまけ

ウヴァ

「うう、俺の角お~」

京子

「全く、何やられてるのよ」

ウヴァは京子に接着剤で角をつけてもらっていた。

義仙

「あ~ら~この義仙の癒しで、ウヴァ様をもつと強くしてあげても

よろしこのに」

ウヴァ

「お前の癒しの場合、凄く寒氣がするんだが・・・」

セス

「では私が癒し差し上げましょ'つか?」

ウヴァ

「お前はもつと嫌!」

グダグダしている一方のテルは、星を見ていた。

テル

(ウヴァの角を折るなんて、北郷零斗、お前は何故強くなろうとする)

そつ思いながらウヴァ達の方へいくのであった。

二話！ 秘密の特訓！？謎の転校生現る。（後書き）

今回登場した戦闘員は烈火竜さんが考へてくれた戦闘員です。

影星

武器

鉤爪 ワイヤー

暗黒流星団の戦闘員。黒い鉄仮面に黒い装束服姿であり、素早い身のこなしと隠蔽術で主に偵察や暗殺を得意とする。

烈火竜さん、ありがとうございました。

四話一 守れ！貴重な宝石！合言葉は…ほよよへん固くない（前書き）

風見ソウスケ

イメージCV 関智一

容姿 爽やかショートヘアに顔はイケメン、服装は青色のゾンシャツ
にジャーパンとスニーカーを履いている。

年齢 18

性格 マイベースで心優しいが、怒ると怖い

ソード&ガン学園から転校してきた男子生徒。一人称は「僕」
銃の腕は未熟だが、剣の腕は天下一品であり、居合いを得意とする。
『戦国BASARAシリーズ』の石田三成がお気に入りであり、
スプレーをして人前等関係無く物真似を良くする。本人曰く「三成と
同じ声だから」である。

四話一 布れ一貴重な宝石一金葉は... 真面目へと固くない

新宿の美術館にて…

零斗とキンジとアリアは、飾つてある宝石を見張るよつて立つている。

零斗

「はあ～見張りかあ～。面倒だぜ」

キンジ

「お前、さつきからそればつかだぞ」

アリア

「やつよ零斗、しつかりしなさい」

面倒だと言つている零斗に注意するキンジとアリア。

彼らはウェスカーに美術館にある『女神の涙』といつ宝石を守る仕事を与えられたからである。

零斗

「武闘大会までの修行だつてのやね～」

キンジ

「零斗、武闘大会までは余裕があるんだ。たまにいつこいつ仕事を受けても良いだらう」

零斗

「キンジい、そつ言つて俺より先に武闘大会に参加する気なのか？」

キンジ

「おーおー、俺は参加しねえよ。むしろ観客席が俺には似合つんだよ」

零斗

「そうですか、でも俺は大会まで修行するぜ」

その頃、暗黒流星団は…

テル

「・・・・」

テルは空を見ており、後ろではウヴァ達が見守つている。

ウヴァ

「また見ているな」

セス

「そうですね、それよりウヴァ、角が微妙にズれているんだが」

ウヴァ

「え？ズれてるー？」

手鏡を取り出し、自分の顔を見る。

ウヴァ

「ホントだ、ズれてるー」

義仙

「京子さん？あなたちゃんとくつつけましたか～？」

京子

「ちゃんと付けたわよ！私の接着剤は固まるのに時間が掛かるのよ！」

テル

「落ち着け義仙、京子」

テルは義仙と京子を制止する。

テル

「新宿の美術館にある『女神の涙』という宝石がある。あの宝石には、特別な力が宿つてると言われている」

セス

「ならば潜入して盗むといつのはじりでしょ！」

テル

「だがその美術館は守りが厳重で、零斗とキンジと言った男とアリアと言った女がいる。女神の涙を取った瞬間、警報が鳴る」

ウヴァ

「ならばこの俺が！」

テルはウヴァの角を掴む。

ウヴァ

「あ、やめて下さいテル様…………俺の角は大変貴重なん

です！」

テル

「よし、今度からウヴァは角キャラとこいつ事にじょい

京子

「テル様、角キャラって何ですか！？しかもウヴァの角、私が治しましたよ！？」

テルのクールボケにツッコむ京子。

そしてテルは角を持ったまま投げ、ウヴァはゴミ箱に逆さまに入った。

テル

「ウヴァは暫く電撃が使えない。誰か潜入して女神の涙を盗んできてくれないかな？」

セス達はこれを聞いて考える。

？？？

「それなら、僕に任せよ

セス達は振り向くと、黒いロープを来た青年だった。

テル
「やつてくれるのか

？？？

「まあ、女神の涙くらい、朝飯前だよ

セス

「テル様にその口を利くとはどうこう……」

セスは前に出ようとするが、テルに止められる。

テル

「その自信、無駄にはするな」

？？？

「分かつたよ」

青年はその場で消えた。

しかし、ウヴァは「ミニ箱に入ったままである。

ウヴァ

「タスケテ……」

場所を戻して新宿の美術館にて……

零斗

「全く変化無し、退屈だ」

キンジ

「退屈つてお前なあ」

零斗

「はあ～修行してねえからなまつちまつぜ」

アリア

「あんたどんだけバトルマニアっしょ我慢しなさい

零斗

「わがままを言ひす子様は黙ってくれ」

アリア

「あんた風穴開けるわよ！――！」

アリアは銃を取り出そうとするが、キンジに止められる。

キンジ
「やめろアリアー！」

アリア

「離してキンジー！」こつ瘤かづくのよ――！」

アリアは更に暴れるが、キンジは必死に止めている。

零斗

「あ～あ、こりゃ大変だな

キンジ

「他人事みたいに言ひつなよ！」

零斗

「よし分かった！お詫びに俺のハジケを！」披露しますよ

キンジ

「ハジケってお前

零斗

「行くぞー。」これが俺のハジケだ！」

零斗劇場 フイギュア達の声

十年前、零斗は物心がついた頃はフイギュア達の声が聞えるようになつたといつ。

零斗はフイギュアショップに入り、田を輝かせて美少女フイギュアを見る。

セシリア・オルコットのフイギュア

『あら？男の子ですかね～』

零斗

「うわあー。」

零斗はフイギュアが喋つて驚くまつた瓦餅をつき、周りの常連客は見ている。

零斗

「今フイギュアが喋つた！フイギュアが喋つたよー。」

常連客

「え？フイギュアは喋つた？おかしな事言つちやダメだよ君

常連客はそのまま店を出て、零斗は首をかしげる。

零斗には置いてあるフイギュアショップの店員に聞いた。
のであつた。

そのままフイギュアショップの店員に聞いた。

零斗

「どうして僕はフイギュアの声が聞こえるの？」

これを聞いた店員は驚く。

店員
「君もなのか！？」

零斗

「え！？ おじさんも！？」

店員がフイギュアの声が聞こえる事に驚く零斗。

その後、店員は零斗と一緒に河川敷に行つた。

店員

「なるほど～何で自分だけフイギュアの声が聞こえるのか、俺は小さい頃、君と同じく不思議に思つちやつたんだ」

零斗

「さうなの？」

店員

「フイギュアの声が聞いたときは驚いたよ。周りの人人が聞こえなくて、俺だけ聞こえる。君を見ていたら、小さい頃を思い出すよ」

零斗はオレンジジュースを飲む。

店員

「ただ分かるのは、フィギュア達に心がある事だ」

零
斗

「アメギニアに？」

店員

「アキラの声を聞いて、心がある人だなと思ったんだ。
ユア達は大切にしてくれる人を待っているんだ」

零斗

「そ、なんた
しゃあ、ギニア選は待てしるんだね！」

店員

ー ああ、待つているんだー

こうして店員は夕陽が沈むとともに去り、それを零斗は見送った。

零斗劇場 フイギュア達の声 完

零斗

懐かしそうに零斗は涙を流し、キンジとアリアはドン呑む。すると

キンジ

「フィギュアの声が聞こえたて……」

アリア

「零斗、ふざけてるの？」

零斗

「ふざけてねえよ」

キ
ノ
ジ

「本当に聞えるのか？」

10

「…・・・・・ある？」

他人事のような返答でキンジとアリアはずつこける。

零斗

キンジ

いきなり何叫んでんだよ！？

零斗

「ピラフ食いてえ――――――――――――――」

そして零斗は『ペリフ』と連呼しながら走り去った。

キンジ

「おおこ零斗！？」

アリア

「バカキンジー零斗を連れ戻してきなさい！」

キンジ

「んな事言われたつてあんなスピードじや俺でも追いつかないぞー。」

アリア

「『いた』た言つてると風穴開けるわよー！」

こうしてキンジとアリアの口喧嘩が美術館に響いたといふ。

女神の涙を警備してから夜になり、キンジは眠そうな顔をしている。

キンジ

「夜になつても零斗が来ねえ・・・」

アリア

「ホント、あいつは腰抜けなのかふざけてるのか分からないわ」

キンジ

「しかもハジケって何だよ？」

アリア

「私に聞かれても困るわよ」

女神の涙の上の天井の扉が開き、先端に鉤が着いているワイヤーが出てくる。

キンジはそれに気付くようにベレッダを取り出し、鉤に撃ち、ワイヤーが切れる。

アリア
「キンジ何やつてんのよー?」

キンジ

「アリアーよく見てみるー」

アリアは女神の涙に近付き、足元を見る。

アリア

「そういう事だつたのね」

キンジ

「ああ、出て来い!もう分かってるんだ!」

キンジは天井の入り口に向かつて叫ぶ。

???

「ふ、バレちゃつたね」

入り口から飛び降りてきたのは、ライオンとトラとチーターを混ぜ合わせたような怪人だった。

キンジ

「お前、暗黒流星団のウヴァなのか!?」

???

「違うよ、僕は暗黒流星団親衛隊隊長、暗殺部隊隊長のカザリ、あの角折れウヴァと一緒にしないで欲しいな」

アリア

「！？」

カザリと聞いたアリアは、何かを思い出したかのよつた顔をする。

アリア

「カザリ、ママを冤罪にさせたグリード……」

カザリ

「ん？ 君は確か、神崎かなえの娘、神崎・H・アリア、君の母親に感謝しないと。お陰でウヴァを蹴落とす時が近付いたってね」

アリアは二丁のコルト・ガバメントを取り出し、カザリに向ける。

アリア

「あんた、その為にママを……」

カザリ

「悪いけど君みたいな子供には用は無い、女神の涙を頂戴させてもうらづみよ」

アリアは発砲し、カザリは銃弾をかわす。

キンジは止めるよつにアリアの両手首を掴む。

キンジ

「よせ！アリア！」

アリア

「離してキンジー！」「いつは私が……私が……！」

カザリ

「こんな玩具で僕に挑もつなんてね・・・」

その時、「ピラフ食いてえ――」と零斗が戻つて来てカザリとアリアとキンジは驚愕する。

零斗は「ピラフう―――」と叫つてカザリを殴り飛ばす。

カザリはそのまま壁を叩きつけられる。

零斗

「ふう～やつと探したぜ」

キンジ

「お前今まで何処行つてたんだよー!?」

零斗

「え? ピラフ食いに行つてた

キンジ

「ピラフを食いに何時間掛かつたんだよー? ってかお前ふざけてるんだろー?」

零斗

「ふざけてないー!」

キンジと零斗のやり取りで呆れるカザリ。

カザリ

「もつバカみたいだよ。さっさと終わらせないと」

女神の涙を取ろうとする。

零斗

「待て！カザリ、そいつは偽物だ！」

ガラスケースの中にある女神の涙が偽物と聞いてカザリは零斗の方へ向く。

カザリ

「それが偽物？…どういう事？」

零斗

「そいつには爆弾が入ってるんだぜ？外した瞬間、ドゴーンだぜ？」
しかしキンジの内心では、不安を抱いていた。

キンジ

（こんな事、信じるわけがない、ハッタリがバレるだけだ）

カザリ

「あ、そう。じゃあ本物を出してよ」

キンジ

「あつさつ信じちゃったよ」のグリードー少しば疑惑よ…」

カザリがあつさり信じてしまつた事にツッコむキンジ。

零斗

「本物は・・・・・」

懷から女神の涙?を出す。

カザリ

「これが本物の女神の涙かい?」

零斗

「ああ、その通りだ。渡す前に・・・・・」

零斗はアリアに向き、手刀で打つような構えをする。

アリア
「な、何よ

零斗

「悪いが少し眠ってくれ

そして強烈に首筋にチョップをし、アリアは氣絶した。

キンジ

「アリアあ――――――――――――――――――

零斗

「邪魔する奴はいなくなつた。渡してやるから受け止めな!」

零斗は女神の涙?を投げ、カザリは素早く女神の涙?を取る。

しかし、握ると柔らかかった。

カザリ

「あれ？女神の涙つてこんなに柔らかかつたっけ？」

零斗

「柔らかいだろ？ それをどう使うのが、分かるだろ？」

カザリは想像すると、顔を赤くし、「なんて卑猥な宝石なんだ！」

卷之三

キンジ

17

カサリ
「こんな卑猥な物がテル様が使いたがつてたとは・・・・・これは
テル様にちゃんと言つておくべき！」

零斗はにやけ、女神の涙？は光り出し、爆発する。

爆発により、カザリは空まで吹き飛ばされた。

これを見たキンジは大汗を流す。

零斗

「・・・」
「ああ、黙れ！」

何か終わつたよつて言つ零斗にすつゝかるキンジであつた。

その後、カザリがテルのお仕置きを喰らつてウヴァに笑われているのは、言つまでも無い。

どんなお仕置きかは、想像にお任せします。

四話！ 守れ！ 貴重な宝石！ 金葉は、ぽよよん固くない（後書き）

零斗

「やれやれ、今回は大変だつてぜ」

ソウスケ

零斗くろん

後ろを振り向くと、石田三成のエスプレをしたソウスケがいた。

ノウスチ

零斗

—
•
•
•
•

ソウスケ

「どう?似てるでしょ?」

零斗

「ああ、似てるぜ」

ソウスケ

ホントに? じゃあ *charlie* やん所の三成にサインもらつて行こうかな?

零斗

へえ、じゃあ行つて来い

ソウスケ

「分かつたよ～」

そう言ってソウスケは行つた。

零斗

「次回、ウヴァにお見合いが！？そして相手はテュランダルで大ピ
ンチだ」

五話一 ウカツにお見合ひへ、妻に女じり注意を（笑）（前書き）

零斗

「作者あ～今年放送されたアニメの『シンondonジル』とスーパー戦隊の『ジエットマン』のクロス小説を書くことに悩んでるんだつて？」

龍の骨

「う～んもうだけど～オリジンは大体出来てるけど、ジエットマンがトレンドイヤだし、シンondonジルは怪盗モノだしな～」

零斗

「難しいだらうな、こっそりジエットマンのよひでトレンドイヤにしたらいへ～」

龍の骨

「こやこやいやいや、トレンドイヤにしたらい、怪盗モノへじやなくなるし～」

零斗

「てか本編に関係無い悩みを持ち込むなよ～じゃあ本編開始～」

五話！ ウヴァにお見合い！？寒い女に注意を（笑）

イタリア、グララン・サッソに建ててある黒い教会では…

テル

「さて、あの零斗達によつて僕の邪魔をされた。よつて戦力を上げる」

教会の食堂で、テルは幹部達と話し合つている。

グララン・サッソに建ててある黒い教会は、暗黒流星団のアジトである。

テル

「戦力を上げるにはまず、優秀な人物を君達の部下にする」

ウヴァ

「だが、俺の部下であるカザリは失敗し、牢屋に閉じ込められている」

テル

「当然だ。失敗したものは暫くの一ヶ月、牢屋だ」

ウヴァ

「テル様にしちゃ、優しいな」

テル

「勘違いするな、優秀な部下を切り捨てたら、戦力は減るし、無駄になるからだ」

そしてテルは、紅茶を飲む。

「そこでだ、カザリの代わりの部下を紹介しよう」

ウヴァ
「どんな奴だ？」

テル
「ただし、君の部下として、君の妻として迎え入れるのならば、紹介しよう」

ウヴァ
「ああ、分かつた…えつ？妻？」

自分の妻と聞いて目を細くする。

テル
「ならない、入れ！」

扉が開き、ウヴァ達はそこに向ける。

出てきたのは、銀髪の三つ編みにしつむじの辺りで結つたストレートロングヘアの髪型で、サファイア色の瞳をした美少女である。

ウヴァ
「ほお～う、これがカザリの代わりの部下か」

テル

「その通りだ、だが彼女には気を付ける

テルの警告を無視して少女に近づくウヴァ。

ウヴァ

「お前、名は？」

少女

「ジャンヌ・ダルク三十世だ」

ウヴァ

「ジャンヌ・ダルクか」

そしてウヴァは壁を叩く。

ウヴァ

「俺の部下になる以上、覚悟しておけ」

少女、ジャンヌ・ダルクが息を吹き掛けると、ウヴァの手が氷る。

ウヴァ

「え？」

ウヴァは自分の手を見ると、青ざめる。

テル

「だから言つたじゃないか。ジャンヌは氷を操る能力を持っている。息を対象物に吹き掛けただけで氷るのさ。それに知略と情報収集が得意だそうだ」

ウヴァ

「えー？ そうだったの！？」

更に大汗を流すウヴァであった。

テル

「それと、僕はジャンヌの両親とは仲が良かつたし」

ウヴァ

「そ、それは一体・・・・」

テル

「うん、お見合いで」

ウヴァ

「そ、それは・・・・」

テル

「では、僕とウヴァとジャンヌ以外は、部屋に出来るよつこ

京子

「お見合いですつて？ あへら戻つてわねえ～

セス

「君の幸せを祝つてあげますよ」

義仙

「ウヴァさん、お幸せ

ウヴァに冷ややかな目で見ながら出ていく京子達であった。

テルとウヴァとジャンヌは座るが、ウヴァは青ざめながら汗を流している。

そんなウヴァをテルは向く見る。

テル

「どうしたんだい？」

ウヴァ

「いや、何でもない」

ジャンヌ

「それより、お前達暗黒流星団は、何をしてるんだ？」

テル

「ああ、僕達暗黒流星団は・・・」

暗黒流星団は、世界を闇に包む負の力を手に入れる為に真拳使いを狩つてゐ事をジャンヌに説明をするテル。

ジャンヌ

「ほお～これが暗黒流星団がやつてゐる事か。世界を闇に包んで何をする？」

テル

「それは言えない」

ウヴァ

「あのお～失礼ですが、ジャンヌ・ダルクは十七歳で火刑で死にま

したよね?」

汗を流しながらジャンヌに問うウヴァア。

ジャンヌ

「残念ながら、あれは影武者だ」

ウヴァ

「や、ですか、ははははは」

これを聞いてウヴァアは苦笑いをする。

テル

「それで、君は聖剣デュランダルを使うんだよね?」

ジャンヌ

「今は無いが、戦闘時には使つ

そしてジャンヌはウヴァアを睨む。

ウヴァ

「ひー!」

ジャンヌ

「ウヴァア、貴様は私に覚悟しきつて言ったよつだな」

ウヴァ

「は、はい。確かに」

ジャンヌ

「貴様も覚悟しろよ、何せ、私の妻であり……私のウヴァ様なんだからあ～」

ウヴァ
「え！？」

ジャンヌのクールなキャラが壊れるようにキャラ崩壊に驚くウヴァ。

ジャンヌ
「だつてだつてえ～ウヴァ様がすっごくカッコ良くて～」

ウヴァ
「おい！お前のクールなキャラはどうしたんだ！」

ジャンヌ
「ウヴァ様の妻になれるなんて、私幸せえ～」

ジャンヌが更に悪化していく事に引くウヴァであった。

ウヴァ

「なあテル様、ジャンヌがキャラ崩壊してるけど……」

テル

「大丈夫だ、問題ない」

と言いつつテルは『DOG DAYS』のレオン＝シェリ・ガレット・デ・ロアのコスプレをしていた。

ウヴァ

「テル様あ――――幾ら同じ声でもそれは不味いぞお――

-----「-----」

テル

「だから問題無いって言つてたんだが」「ひいだる

ウヴァ

「大有りだ！」

テル

「彼女は君に命つと思つよ」「みつ

ウヴァ

「ジャンヌは氷を操るんだろう…？俺は寒いのダメなんだよ…」

そう、ウヴァは昆虫系グリードである為、寒いのが苦手である。

ジャンヌ

「でも、私はウヴァ様のクワガタの顎の角とカマキリの鎌と複眼と外骨格や節足敵な突起に覆われたボディに惚れたから～」

ウヴァ

「俺は寒いのはダメなんだ！ダメなんだよー……………」

ウヴァは逃げ出し、ジャンヌは追いかける。

ジャンヌ

「待つてくださいウヴァ様～」

ウヴァとジャンヌは部屋から出て、テルは取り残されたのであった。

テ
ル

「早速仲良くなつたな」

のんびりしながら紅茶を飲んだ。

一方ウヴァは外から出て舞空術を使つて飛んだ。

ウヴァ

(ふう) これで流石のジャンヌも使えないだろ(う)

安心しつつ後ろを振り向くが、青ざめる。

ジャンヌ

「ウヴァ様、私はどこまでもウヴァ様についていきます」

聖剣デュランダルを持つたジャンヌがウヴァと同じ舞空術を使って追いかけている。

何かに逃げるよつにスピードを上げて逃げて行き、それを追いかけ
るよつにスピードを上げるジャンヌだった。

東京新宿では・・・・・

零斗

「つたくまた警備かよ」

キンジ

「当然だろ？、昨日暴れたんだから警備するだろ？」

白雪

「キンちゃんの雪通りだよ」

キンジの隣にいるのは、星加白雪である。

零斗

「やつこや何で白雪なんだ？」

キンジ

「ああ、昨日風邪をひいてしまって休んでる」

零斗

「んだよつまんねえ～」

キンジ

「仕方無いだろ？」

その時、「わあ——————」と叫ぶ声がし、零斗達は警戒する。

ウヴァが自動ドアをぶち破つて來た。

ウヴァ

「助けてくれ！助けてくれ！助けてくれ——————！」

ジャンヌに恐れていのウヴァは助けを求めるように叫びながら暴れ、零斗は「落ち着け——————」と殴り飛ばした。

涙目になつてこむウガアに近付いた。

零斗

「どうしたウヴァ、まさか女神の涙を盗まないとクビにされるってやつか？」

ウ
ヴ
ア

零斗

ウ
ブ
ア

「だから！ 緊急じた・・・・・・」

「ウブア羨」

ジャンヌの声がするとウガアは振り向き、ジャンヌはテコランダルを構えていた。

ウ
ヴ
ア

ウヴァは走り出して窓を突き破つて出た。

ジャンヌは「待つてくださいウヴァ様」と突き破った窓から出て

追いかける。

「これを見た零斗達はすぐ気が付いた。

零斗 キンジ 白雪

()(ああ、そういう事か)()

ウヴァーは街中を逃げ回つており、ジャンヌは追いかけている。

ウヴァー

(どうすりゃ良いんだ!…どうすりゃ良いんだ!…)

後ろを振り向くと、ジャンヌとの距離はだんだん縮めていついていた。

ウヴァ

(このままでは、俺は氷漬けにされる!…そうか、人間態になれば…
…でもまずはジャンヌをまかなければ…)

田の前には、ライアンがいた。

ウヴァ

「一度いい、そここの野郎!」

ライアンはウヴァーの声に向くと、驚愕する。

ライアン

「なんだ君は!…」

ウヴァー

「俺を追いかけている女の相手をしてやれ!」

ウヴァーはそのまま逃げていった。

ライアン

「女を相手に？」

「ウヴァ様」

ライアン
「そういう事か」

そこにジャンヌの前にライアンが立ちふさがる。

ライアン

ジャンヌ

邪魔よあんた！」

そしてジャンヌはテュランダルでライアンを吹き飛ばし、ウヴァーを追いかけた。

その頃、ウヴァはどうしてゐるかといつと……

ウヴァア

(ふう～これでジャンヌも歸ぬんだわ。でも、おひくつかるか)

人間態になつており、喫茶店でくつろいでいた。

その時、「ウヴァ様」とジャンヌが入り、ウヴァはビクつとする。

ジャンヌ

「ウヴァ様～？ウヴァ様はどういいますか～」

ウヴァ

(今の俺は人間だ！気付かれないぜ！)

ジャンヌはウヴァを探し、ウヴァは大量の汗を流している。

そしてジャンヌは諦めたのか、その場を去りつとする。

ウヴァ

(これでの氷女と結婚せずに済む)

ジャンヌ

「ウヴァ様～」

ジャンヌの声が聞えると、恐る恐る隣を見る。

ジャンヌ
「見つけましたよ～？」

ウヴァ

「お前何で分かった！」

ジャンヌ

「ウヴァ様ある所ジャンヌ有りですよ～」

ウヴァ

「理由になつてねえ！ってかどうして変わってるんだ！クールな性格はどうした！？」

ジャンヌ

「・・・・そんなの決まってるじゃない、好きな人がいるから変われるんだよ！」

ウ
ヴ
ア

「おおい声優ネタ使うな！それに変わりすぎだろ！ゴム鉄砲をハンドガンに変えたようなものじゃねえか！」

ジャヌ

「うふふふふ、まあウヴァ様、私の想いを受け止めてください」

ウヴァの叫びと共に食べられた（性的な意味で）。

翌日、複眼と胸部以外は白に変わつて幹部たちが驚いたのは、言うまでも無い。

五話「ウヴァーにお見合い!~寒い女に!」注意を(笑)(後書き)

零斗

「ここでお知らせだ!出してほしいアニメ、ゲーム、マンガ、特撮、ラノベを募集するそ�だ」

ソウスケ

「出してほしい作品がある場合、感想に書いてください」

零斗

「但し、作者が知っている作品しか出さないから承ってください」

ソウスケ

「次回!」BXでミソラー中の不良達とバトル!更に峰理子が乱入!
!?『六話! ジャングル! 待った無しのガチンコバトル! りつこ
りこにしてやんよ~!』お楽しみに!」

六話！ ジャングル！待つた無しのガチンコバトル！

龍の骨

「今日はダンボール戦機が発売した～！！！」

零斗

「つーか発売日に投稿するもんだろ？」

龍の骨

「はい、本来ならそうしたいのですが、スランプがあつたりしまして・・・」

零斗

「言い訳は良い、さっさと始めるぞ」

六話！ ジャングル！待った無しのガチンコバトル！

B S A A 学園の三年A組では・・・・・

零斗は『週間L BX』を読んでいた。

フランケン

「零斗、何読んでるんだ？」

零斗

「ん？ 週間L BXだけ」

フランケン

「L BXって・・・・ 確か危険性があつたため一時発売中止になつて、強化ダンボールのお陰で子供達に人気になつたんだよね」

零斗

「その通り。そのL BXの研究をしているんだ」

フランケン

「研究つて・・・・・ どんな？」

零斗

「いやあ～人間の魂をL BXに移してバトルし、負けたらあの世行きといふ・・・・・」

フランケン

「それ危険じゃねえか！ つていうかそれ殺し合いしかないから…やつたら今度こそ発売中止になる！」

零斗

「甘じなフランケン、命を懸けてこそがLBXバトルなんだ。LBXの気持ちになつて戦う、良い事じゃねえか」

フランケン

「それ絶対トライア産むからー。LBXの人気が落ちるー。」

零斗のとんでもない考へにツッコむフランケンであった。

するとキンジとアリアがやつて來た。

キンジ

「零斗、お前またLBXの雑誌讀んでんな」

アリア

「どんだけ好きなのよ」

零斗

「いやあ～これ見てたら欲しくなつちやつてそ～特に俺が欲しい」
BXは・・・」

そして零斗はキンジ達に週間LBXを見せた。

零斗

「ブルドなんだよね～改じやないやつ」

キンジ

「確かにブルドは地形走破能力に優れてるが、スピードに劣るぞ～」

零斗

「それが良いんだよ。それに重機とかそういうの好きだし」

「これを聞いてフランケンとアリアとキンジは呆れる。

零斗

「今日俺のブルドが届くんだよね~早く家に帰る~」

キンジ

「お~、次授業だぞ?」

零斗

「わーったよ。じゃあ放課後つて事で」

チャイムが鳴ると、フランケン達は席についた。

教室の前の扉が開き、雪蓮とジョッシュが入ってくる。

雪蓮

「はあ~い、ホームルームの時間だよ~。今日は私について教えてあげちゃうよ~!」

ジョッシュ

「質問がある人は手を挙げてね~」

テンションが上がりっぱなしの雪蓮に引き気味の生徒達（零斗を除いて）だった。

雪蓮

「質問ある人はいるかな~」

すると零斗が手を挙げ、立つた。

零斗

「雪蓮先生の好きなBXは何ですか～？」

生徒達

「――「それ関係ないだろ！？」」

零斗の質問に一斉にジックりむ生徒達。

雪蓮

「好きなBXねえ～私はクノイチかな

「クノイチですか～」

生徒達

（（（（（わ～～～～～～～～～）））））（（（（（教師））））

その後、零斗の質問が終わった後、生徒達は雪蓮に質問をしたとい
う。

放課後・・・・・

零斗はクラウザーの居酒屋もと、自宅まで走っていた。

零斗

「おっちゃん！荷物届いてるかー？」

零斗は扉を開き、クラウザーに荷物を届いたかを問う。

クラウザー

「ああ、届いてるぜ。これだろ?」

クラウザーはテーブルに置いてあるダンボール箱を零斗に渡した。

零斗

「いやあ～欲しかったんだよな～これが」

クラウザー

「そうか～」

零斗は自分の部屋へ行き、ダンボール箱を開けた。

中に入つてたのは緑色のブルドビルドアックスとCCMだった。

CCMとは、LBXをコントロールをする携帯端末であり、画面にLBXの状態を表示し、携帯電話としても使える。

零斗

「では早速動かしてみよう」

CCMを起動させ、LBXの設定をした後、ブルドを動かした。

ブルドは置いてあつたブルドアックスを拾い、振つた。

零斗

「いやあ～良いねえ～」

ブルドを動かして楽しそうな零斗であった。

こづして私服に着替え（マイティコートは着たまま）、街を歩いた。

その時、携帯が鳴り、零斗は取り出してかけた。

零斗

「何だ？」

キンジ

『零斗、大変なんだ！』

キンジからの電話だった。

零斗

「何だ？」

キンジ

『ミソラ一中の四天王の三人が、ＬＢＸの破壊活動をしている！しかもＬＢＸで…』

零斗

「マジで？そりゃ大変だ」

キンジ

『他人事みたいに言つなよ！早く河川敷に来てくれ！』

零斗

「はいはい、いつも俺が修行している河川敷ですね～分かりました。すぐ急行します」

そして電話を切り、河川敷に向けて走つて行った。

河川敷にて・・・・・

アリア
「ぐつ、なんてＬＢＸなの！？」

？？？

「もう二これまでかい？」

？？？2

「余裕でごわす！」

？？？3

「へへへへ、『双剣双銃』も大した事ないな」

アリアはジャングルのジオラマで自分のＬＢＸ、クノイチで戦つて
いるが、ホバー型のＬＢＸクイーンと水陸両用型ＬＢＸナズーとカ
メレオン型ＬＢＸマッドドッグに苦戦していた。

そのＬＢＸを操作しているのは、赤い学ランに小柄な少女、矢沢リ
コと大柄の男、亀山テツオと、顔色が悪くゾンビのような風貌をし
た男、鹿野ギンジだつた。

アリア
「零斗はまだなの！？」

キンジ

「いや、電話したから来ると思つ

一方、クノイチは二つの銃でナズーに撃つが、かわされ、クイーンのハンドガンを喰らう。

アリアのCCCに表示されているクノイチの体力は、半分だった。

アリア

(不味いわね、半分の体力で三体の攻撃をまともに喰らつたら、私のLBXは確実に終わるわね)

テツオ

「これで終わりでござます！」

ナズーは襲い掛かるうとし、クノイチは防御体勢をとった。

その時、緑色のブルドが現れ、ナズーはブルドアックスで吹き飛ばされてしまう。

アリア

「これって……まさか！」

アリアが後ろを振り向くと、CCCを持った零斗がいた。

零斗

「待たせてしまつたな。さあ、ここからが盛り上がる所だ！Let ! Party！」

零斗は叫び、ブルドを動かす。

ブルドはナズーをブルドアックスで攻め、テツオは少し慌てる。

零斗

「オラオラオラオラオラア――――――――――」

テツオ

「うわわわ・・・・・」

リコ

「くつ！ ブルドなのに何で押されてるんだ！ ？まさかお前、相当な実力を・・・・・」

零斗

「違うな、今日が初めてなんだ！」

零斗の発言により、周りの空気は冷めた。

リコ

「は、初めて――――――――――――――――――――」

ギンジ

「初めてなのにこんな操作出来んのかー？」

テツオ

「そうには見えないでござります！」

初めてな零斗に驚く四天王の三人組、勿論アリアとギンジも驚いている。

アリア

「あんた初めてって・・・・・」

零斗

「安心しろ、今のブルドにアタックファンクションが無い。だが・・・燃える鬪志はある」

四五

燃える鬪志にてあんた・・・・・

卷之三

そしてブルドは、ナズーに突っ込む。

リコ

傳世之語

零斗の叫びにツツコむリコ。

ブルドはナズーに猛攻撃を喰らうが、ナズーアームから水色のレー
ザーを放ち、ブルドにあたる。

零斗

「くう～これは痛いねえ～だが・・・・」

ブルドはブルドアックスを地面に置き、ロケットランチャーを取り出した。

零斗

「あのナズーはもう終わりだあ――――!――!

ロケットランチャーの弾を放ち、ナズーは直撃し、爆発した。

テツオ

「そ、そんな・・・・・」

零斗

「初めてなのに勝っちゃつなんていいや～予想外だつたよお～」

アリア

（よ、予想外じゃないでしょ・・・・・）

内心では呆れているアリアであった。

クイーンはハンドガンでブルドに攻撃する。

零斗

「おい、不意打ちなんて反則だぞ～」

リコ

「つぬせこ」のハジケリストーそのハジケたLBXをぶつ壊してやるー！」

リコはブルドに対し怒りを露にしえいる。

零斗

「はあ～しようがないなあ～」

アリア

「こや――――――」

零斗

「ん？」

アリアのクノイチがマッシュドピーリングに追いやられていた。

ギンジ

「お前の」「BXは」これまでだなー」

零斗

「アリアあー—————!これを使って反撃しろ—————
—————!

そしてブルドは、ブルドアックスをクノイチに投げるが、受け止められず、ぶつかって倒れてしまつ。

体力は少しだけ減ったが、ブルドアックスの重さで起き上がりくなっている。

アリア

「何すんのよー!」

零斗

「えへへやつちやつた

アリア

「やつちやつたじやないわよー!」

ギンジ

これを見たり」「とギンジは呆れる。

「うわあ～グダグダじゃねえか

キンジも呆れていた。

しかしブルドはロケシットランチャーでクイーンに攻撃し、リコはそれを見た瞬間慌てる。

ブルドはブルドアクスを拾い、クイーンに強烈な一撃を打てる。同時にクイーンは動かなくなつた。

リコ

「そんな・・・・・この小説・・・・不条理なのか・・・・?」

そして由田になつて倒れた。

ギンジ

「チツ！くたばつたか」

マッドドッグは姿を消し、ブルドとクノイチは探すように動く。

その時、黒いL BXが現れ、マッドドッグの腹を右手の爪で貫いた。

零斗

「何だ！？」

ギンジ

「こ、この子のインビートつてまさか・・・・・」

ギンジは振り向くと、CCMを持つた金髪でフリフリの改造制服を

着た少女の姿がいた。

アリア

「あんた・・・・・・まさか・・・・・」

???

「理子は暗黒流星団の影星隊の隊長、峰理子」

零斗

「ほお～う、確かにこのL BX、自律型L BXじゃなかつたっけ?」

理子

「ふふふ、理子はね、このL BXをコントロールを出来るように改造したんだよ?」

アリア

「改造つてあんた・・・・・」

零斗

「その改造したLBX、強いのかどうか、見てみたいぜ」

理子

「良いよ、見せてあげる」

インビットは素早く走り、クノイチは銃で攻撃するが、かわされ、爪で腹を貫かれてしまう。

アリア

「そんな・・・・私のクノイチが・・・・・」

ショックのあまり、アリアは膝をつぐ。

零斗

「この光景を見ると、シャ　専用ズ　ツクガジ　の腹を爪で貫いた
シーンを思い出すぜ」

理子

「へえ～そりなんだ～」

ブルドは白いオーラを湧き出し、インビシットは紫のオーラを湧き出した。

六話！ ジャングル！待つた無しのガチンコバトル～ワニカラリヒトヤニホ

零斗

「いじで、オリジナルL BXを募集しま～す」

龍の骨

「六月十六日にダンボール戦機が発売した記念として、オリジナルL BXを募集したいと思います！」

零斗

「ではその応募方法を教えます」

・名前

・特徴（または作品のモチーフ）

・武器 必殺技

・詳細

零斗

「つてな感じです。感想とメッセージでお願いします」

龍の骨

「締め切りは七月一日です」

零斗

「それでは、次回をお楽しみに～」

七話！ クラス学級員長をかけたLBXバトル開始！まだ序章だよ～ん（前書き）

前回の反省をふまえて、零斗のクラスのキャラを出しました。

零斗

「ホント前回はダンボール戦機を知らない人がいたら置いてきぼりにされる内容だつたよな～」

今回は烈火竜さんが考へてくれた戦闘員が登場します。

ダンボール戦機を知らない人は注意してください。

七話！ クラス学級員長をかけた！ BXバトル開始！まだ序章だよ〜ん

【アフリカ キジュジュ】

村人1

「やあへへさへあわ
」-----

火炎放射器を持つた戦闘員と手榴弾を投げる戦闘員達が村人を殺していった。

その戦闘員の名は炎星、火炎放射器で証拠隠滅や敵を抹殺する戦闘員である。

時には手榴弾を使う。

? ? ?

「ヒヤーッハハハハハハハハ！燃やせ！もつと燃やせ！灰になるまで燃やせえ————！」

炎星を率いる金髪のモヒカンの男は村人が燃える光景を楽しんでいた。すると、

モヒカンの男

「良いパーーティだぜえ————最高だ！」

するとポケットから携帯の着信音が鳴り、モヒカンの男は取り出す。

モヒカンの男

「はい、副隊長のエミーです。……了解しました」

モヒカンの男、H E L L は携帯をしまい、炎星に向く。

HILL

「お前等よく聞け！アンク隊長の命令だ！」村に設置してある爆弾で吹っ飛ばせ！」

「エー」は怪しい笑みを浮かべる。

H E L L

「……………そしてこの村を灰にしたら、アンク隊長とバー・ティだあ――」

炎星達

こうしてキシユジュの村は、設置された爆弾によって、炎に包まれた。

これを見た少年は、膝を落として涙を流す。

少年

「そんな、僕の帰る場所が・・・・・」

【新宿の路地】

理子のインビシットと零斗のブルドが互いにオーラを出し合っていた。

そして、ブルドはブルドアックスを構え、インビットを前に出して構える。

理子

「理子のインビットには、肩についてあるパート、無いでしょ？」

零斗

「ん？ 確かに無いな」

理子

「これはね、理子が操縦出来るように外したの」

零斗

「へえ～ 考えたね～。じゃあその力、見せてもらひつか！」

理子

「かかつて来なよ～」

ブルドはロケットランチャーのロケットを放ち、インビットはそれをかわす。

インビットは爪で攻撃し、ブルドはブルドアックスで防ぎ、打ち合ひ。

零斗

「中々やるじやねえか」

理子

「そつちもね。でも理子の本気はこんなんじやないよー」

『アタックファンクション 地獄乱舞』

理子のCCMの画面に必殺ファンクションが表示され、インビジットはブルドを高く打ち上げ、空中で乱打し、最後の一撃で地面に叩きつけた。

ブルドはその衝撃でバラバラになってしまった。

零斗

「あーあ、ブレークオーバーしちまつたな」

理子

「あはは～理子の勝ちだよ～」

そしてバラバラになつたブルドを拾い、懷に入れた。

零斗

「やれやれ、俺のＬBXじゃダメだったか、じゃ帰るわ」

零斗はその場で立ち去つた。

キンジ

「お、おい」

後からキンジは零斗を追いかける。

理子

「さて、それじゃあ理子も帰るつと」

そして理子も帰つた。

アリアは・・・・・

アリア

「クノイチがやられた・・・・・・」

クノイチが壊されたショックで動けなくなつてゐる。

因みにリ「達も帰つていつた。

【零斗の部屋】

零斗

「はあ～、つたべむ気に入りだつたのによ。壊されちやつたが

零斗は壊れたブルドを見て呟いてゐる。

すると隣に白い箱があつた。

零斗はそれを拾い、つこしてある紙をとつた。

その紙には、こう書かれていた。

『「」の「BX」は零斗君の力になるよりソウスケ』

零斗

「BXねえ～」

箱を開けると、アーマーフレームとコアスケルトンだった。

零斗

「何だこれ?」このアーマーフレームをコアスケルトンに付けたりして
訳か

これを見て理解した後、零斗は早速アーマーフレームをニッパで取り、コアスケルトンにつけた。

零斗

「で、出来た・・・・・・」

田の前には、『遊戯王NEXAL』の希望王ホープに似たLBXだった。

零斗

「ここの名はホープ・・・・だつたっけ? 早速動かしてみるか

そしてCCMを取り出し、ホープは動く。

零斗

「おお～カッコいいなあ～」

更に双剣を取り出し、剣を振るう。

零斗

「すげえなあ～そうだ、ブランドをソウスケに直してもりおひ。確か
模型店の息子だつたな」

そして零斗は部屋の明かりを消し、布団を敷いて寝た。

零斗は居酒屋から出て走って登校する。

その途中、皇牙に会う。

零斗

「皇牙～」

皇牙

「零斗か？」

零斗

「さうだぜ～、昨日良い事あつたんだよ～」

皇牙

「良い事？」

皇牙は首を傾げ、零斗は学生バッグからホープを取り出す。

皇牙

「零斗、それ～BXか！？」

零斗

「そう、帰宅した時、白い箱があつたんだ。その箱を開けると、なんといつこのアーマーフレームとコアスケルトンのセットが入つてたんだよ～。しかもこの～BXの名はホープだ！」

皇牙

「へえ～」

興味津々にホープを見る皇牙。

皇牙

「実は、俺もなんだ」

皇牙は学生バッグからL BXを取り出す。

そのL BXは、『コンパチブルカイザー』にそっくりだが、胸の宝石らしき物の中にアルファベットの『K』と書かれていた。

皇牙

「昨日、帰宅してすぐに飲み物を取りに行こうと冷蔵庫に向かおうとするときに、変なアタッシュケースがあつたんだ。そいつを開けてみるとここにこのL BXが入つてたんだ」

零斗

「ひつや凄いな。ひいつのなま?」

皇牙

「カイザーディアン、このL BXに『^{オーバーゲート}OGHンジン』がある

これを聞いた零斗は、首を傾げる。

零斗

「何だそりや?」

皇牙

「俺にもわからねえ、とにかくそいつについでソウスケに聞いてみるか」

零斗

「やつだな、それよつもな、LBXを肩に乗せて登校しようぜ」

皇牙

「ああやつだぜ」

零斗と皇牙は、自分のLBXを肩に乗せて歩いていた。

【BUAHA園 二年A組】

フランケン

「やつか、零斗のLBX、壊されひやったんだ」

キンジ

「やつこいつわけなんだ。それとアリアのクノイチも壊されてる」

フランケン

「零斗はともかく、アリアは相当落ち込んだだらつた」

フランケンはキンジに昨日の出来事を聞いて少し顔を下に向く。
すると・・・・・

アリア

「だれが落ち込んでもんですか?」

アリアの声にキンジとフランケンは反応する。
キンジ

「アリア！？」

アリア

「私がそんな事で落ち込むわけが無いでしょ。見なさい、クノイチは直ったわ」

キンジとフランケンはアリアの右肩に乗っているクノイチを見る。

キンジ

(直つたんだ・・・・・)

そして『戦国BASARAシリーズ』の石田三成のコスプレをしたソウスケが現れ、キンジ達は驚く。

ソウスケ

「おはよ～みんな～」

フランケン

「ああ、おはよ～って！何でコスプレしてんの！？」

ソウスケ

「いやあ～僕、『戦国BASARA』のキャラの中でも三成が好きでまあ～しかも僕の声って三成と同じ声してるでしょ？」

フランケン

「いや、そう言われても・・・ってか中の人繋がり！？」

ソウスケ

「まあそう言つかもね」

「これを見て少し呆れるフランケンとキンジであった。

零斗
「おはよウ皆一。」

皇牙
「ちいっつす。」

フランケン

「ああ、おは・・・・・って零斗と皇牙の肩に見たことも無いLBX
が乗つてゐるぞ！？」

零斗の肩にホープ、皇牙の肩にカイザーディアンが乗つている事に
驚くフランケン。

フランケン

「零斗、どうしたの！？そのLBX・・・・・ブルドはどうした！？」

零斗

「え？ ああ そうだった、こいつを直してもひつんだったんだ」

フランケン

「いや、そういう問題じゃなくて・・・・・」

零斗のボケに冷静にツッコミを入れるフランケンであった。

懷から壊れたブルドを出し、ソウスケに渡す。

ソウスケは壊れたブルドを見る。

零斗

「どうだ？ 直せなかつか？」

ソウスケ

「直せなくはないけど、やつてみるよ」

学生バッグからドライバーやペンチ、接着剤を取り出し、自分の席に座り、壊れたブルドを机に置いて修理を始めた。

一夏

「何やつてるんだ？ ソウスケは」

第

「どうやら」「BXを直してくるよ」

ソウスケがブルドを直す様子を見る一夏とソウスケだった。

零斗

「おつ第と一夏じやん」

一夏

「零斗、ソウスケは」「BXを直してくるよ」

零斗

「ああ、あれか？俺の」「BXを直してくる」

第

「お前の…だがお前の」「BXは肩に乗つてるので…」

零斗

「ああ、これは二号機だ」

一夏
第

「二号機!?」

一夏と筈は、声を合わせて驚いたような言動をとる。

零斗

付きの箱を見て思い出した

「悪い出したんだ・・・・つてか手紙付きの箱つてどんなんだ?」

零斗

肩に乗っているホープに指を指した。

一
夏

「これって、見たことない」BXだな

零斗

「まあ、日頃の良い行いをしてきたから、さつとこの「BX」が来
たんだな~」

一夏

(いや、田頃の良い行いをしているよつには見えないよつな……。)

零斗の発言によつ、少し引く一夏であった。

チャイムが鳴り、零斗達は席に着き、前の扉が開いて雪蓮とジョッショウが入ってきた。

千姫の命令により、^{ショートホーミルーム}SHRが始まった。

雪蓮

「雪ちゃん、おはようびじきこま～す。今日の一時間田は数学ですが、予定を変更してHRにしま～すー。」

すみどなのはが手を擧げる。

なのは

「あの～～じうして変更をしてHRなんですか?」

雪蓮

「え～～せつですねえ～」

雪蓮ビジュン開始

【職員室】

雪蓮は化粧をしており、機嫌を悪くしている眞琳がやつて来る。

眞琳は「雪蓮ー！」と言つて机を叩き、雪蓮は驚く。

雪蓮

「な、何ー？」

冥琳

「いつまで学級委員長が決まるんだ！？」

雪蓮

「え？何の事？」

冥琳

「他のクラスは学級委員長が決まり、雪蓮のクラスだけ決まってない！」

雪蓮

「ええ！？」

自分の担当のクラスだけ学級委員長が決まっていないと聞いて驚く

雪蓮。

冥琳

「一日以内に学級委員長を決めてもらひつと理事長が言つてから五日たつてている」

雪蓮

「七日前の日、私は出張でいなかつたわよ！何で教えてくれなかつたのよ！？」

冥琳

「私はその七日前の日にメールしたぞ！」

雪蓮

「えー？嘘つー？」

慌てて携帯を取り出し、メールを見て青ざめる。

雪蓮

「げつー?」

冥琳

「あなたが気付かないせいで、私は理事長に大玉玉を貰ひうた

雪蓮

「ちょっとーそれって私のせいだって言つのー?」

冥琳

「あなたが気付いていれば、こんな事にはならないで済んだー!」

雪蓮

「何よーー!」

雪蓮と冥琳の口喧嘩は、朝のSHRの五分前まで続いたといつ。

雪蓮ビジュン終了。

雪蓮

「とこつ訳なーー!」

これを聞いた生徒達は少し呆れる。

シャロ

「あのーそれって気付かない先生がいけないんじゃないんですか?」

雪蓮

「うっ、で、でも電話で伝えればクラスの学級委員長は決まるの！」

零斗

「そうだよなあ～確かに冥琳先生がいけないよなあ～

千姫

「あんた何同情してんのよー!？」

零斗が雪蓮に同情するような発言にシシ「!!」を入れる千姫。

雪蓮

「そうだよね～零斗君分かってるじゃな～い

セシリア

「あなたは自分が言つてることが何だか分かつてますのー?」

嬉しそうな雪蓮にシシ「!!」を入れるセシリア。

零斗

「お前等雪蓮先生を責めすぎだ、雪蓮先生だってすんじゃく苦労してんだぞー！」

フュイト

「いや別に責めてないよー!？」

レスター

「全然苦労しているような感じには見えなかつたよー!？」

零斗にシシ「!!」を入れるフュイトとレスターであった。

ソウスケ

「皆、雪蓮先生を苛めないで・・・・・」

涙目になるソウスケの隣には、腕を組んでいる一刀がいた。

一刀

「そりだぞ、雪蓮先生を苛めるに許さんからな、雪蓮先生の気持ちを分かつてるのは零斗達と俺だけだからな」

エリオ

「苦労を知らぬ者、イカロスの名において断罪を下す」

キャロ

「そして私からはクナイ千本だよ～」

ネロ

「いやいやお前等全然分かつてないだろ！？そしてその二人！物騒な事を言つたりしようとしたりしないで！」

ソウスケと一刀とエリオとキャロにツツツツミミを入れるネロ。

零斗

「だあ――もひつむせえ――――！」

そして零斗が大声で言つと、静まった。

零斗

「こんなグダグダじやいつまで経つても決められねえじゃねえか！早く決めたいからしBXバトルで白黒つけようぜ！」

ライアン

「白黒つけるって……」

零斗

「L BXバトルで、立候補者同士で戦い、勝った奴が学級委員長になれるところのはじうだ?」

これを聞いて生徒達はざわめく。

アリス

「LBXバトル! ?」

夕化

「しかも、勝つたら委員長になれるって」

ネココ

「もし、零斗が勝つたら『やーのー! ……』

コロナ

「零斗が委員長! ?」

そして四人は零斗が学級委員長になる妄想をする。

零斗

『俺が学級委員長になったからには、お前等を引っ張る。よひしくな』

アリス タ化 ネココ コロナ
『良いかも(にやーの)~』

カリーナ

「何を妄想しているんですのー? あなた達はー?」

妄想している四人にツッコむカリーナ。

雪蓮

「良いわね~そのLBXバトルで決めるの。じゃあ採用!」

レスター

「良いのかー? これで! ?」

零斗

「じゃあ、参加者をリストアップ!」

紙に書かれていたのは、『零斗VSセシリ亞 たけしVSキンジ
アリアVSアックス ダイチVSカリーナ タツヤVS一刀 皇牙
VSライアン』である。

零斗

「では、決まつたな。それとたけし、どうした?」

暗い表情をしているたけしに声をかける零斗。

たけし

「すみません、俺LBX無くて、CCMならあるんですけど・・・。
・

零斗は直ったブルドをたけしに渡す。

たけし

「え？」

零斗

「こいつを持つてけ、きっと力になってくれるはずだ」

貰つた時、たけしの表情は明るくなつた。

たけし

「ありがとうございますー！」

零斗

「では、一回戦を始めるぞー！」

ロキューブは展開し、地中海遺跡のジオラマのステージになつた。零斗は懐からロキューブを取り出し、ボタンを押して黒板の近くに投げた。

零斗

「一回戦、始めようぜ！」

セシリア

「私のLBXは強力ですわよ」

そしてセシリアと零斗は、ジオラマのステージに向かつた。

七話！ クラス学級員長をかけたLBXバトル開始！まだ序章だよ～ん（後書き）

オリジナルLBXの募集の締め切りは七月一日を過ぎてしまった為、七月一十三まで募集します。

零斗

「応募条件は前回の話の後書きに書いているからよろしくな！」

それとダンボール戦機を知らない人に深く、お詫び申し上げます。

本当にすみませんでした！

炎星

武器 火炎放射器 手榴弾

火炎放射器で証拠隠滅や敵を抹殺する戦闘員。
時に手榴弾を使う。

八話！ 学級委員長をかけたＬＢ×バトル！ 負けたら罰ゲームね～（前書き）

零斗

「え～今回で、ＬＢ×編は終わるぞ」

龍の骨

「皆さんホントに申し訳ありませんでした」

スライディング土下

座

八話！ 学級委員長をかけたＬＢ×バトル！ 負けたら罰ゲームね～

零斗とセシリ亞は、ロキューブの前にいた。

そのロキューブにあるジオラマは、地中海遺跡である。

零斗

「さて、お前のＬＢ×を見せてもらひつか」

セシリ亞

「良いですわ」

セシリ亞の肩に乗っているＬＢ×は、ＬＢ×アサシンを青くしたような機体だった。

零斗

「へえ～、アサシンか」

セシリ亞

「違いますわ、このＬＢ×は神谷重工で作られたアサシンにブルーティアーズの機能を付け足したＬＢ×『ブルースカイ』です！」

零斗

「ブルーティアーズの機能をねえ、ならば俺のＬＢ×はホープだ、こいつには注意しろよ」

そして零斗とセシリ亞は、CCMで設定をする。

零斗

「ホープ！」

ホープはジオラマの方へ移り……

セシリ亞

「ブルースカイ！出撃ですわ！」

ブルースカイはジオラマの方へ移つた。

二体のＬＢＸは、互いに武器を構える。

ホープは双剣を持って走り、ブルースカイはスナイパーライフルで
撃つ。

ホープはそれをうまくかわし、攻撃する。

攻撃されたブルースカイは、体力が少し下がる。

零斗

「ふふふ、先に攻撃させてもらつたぜ」

セシリ亞

「やりますわね、しかしブルースカイが遠距離攻撃だけのＬＢＸだ
と思いまして？」

零斗

「何？」

ブルースカイは武器を斧型の剣、ヘビィソードを取り出す。

その攻撃を防ぐホープは押し返し、攻撃する。

セシリ亞

「流石はホープですわ、ならば本氣で行かせてもらいますわ！」

するとブルースカイの背中から四つの青いビットが出てくる。

ビットはレーザーでホープに狙い、ホープはそのレーザーをかわす。

零斗

「これがブルーティアーズの機能か、面白え」

ホープはビットのレーザーをかわしながらブルースカイに近付いていく。

しかし、一発見らつてしまつ。

零斗

「チイ、 そう簡単には近付けねえってか」

ホープはビットのレーザーをうまくかわす。

零斗

（くそ～あのビットを何とかしねえと……ん？待てよ……）

零斗はセシリ亞のCCMを見て、何か気付いた。

そしてホープは、ビットのレーザーをかわし、ブルースカイに体当たりをし、ブルースカイに攻撃しようとするが……

セシリ亞

「掛かりましたわね」

ブルースカイは腰に付いてあるミサイルランチャーを展開させ、ホープに放った。

零斗

「ヤバつ！」

ホープはミサイルを何とかかわすが、一発のミサイルに喰らった。

セシリ亞

「どうです？私のブルースカイは？」

零斗

「ヤベエなあ・・・これホントに勝てないかも・・・」

その時・・・・

零斗のCCMに『ダブルバーニングエッジが使用可能になりました』と表示されていた。

零斗

「使用可能か、試してみるか！」

そしてホープはビットのビームとミサイルをかわしながら走り、ブルースカイに近付いた。

零斗

「今だ！必殺ファンクション！」

『アタックファンクション ダブルバー・ングエッジ』

ホープの剣身が赤くなり、ブルースカイを連續で切る。

そして怯んだ所でアップバーをかまし、ブルースカイはブレイクバーした。

セシリ亞

「そんな・・・私が負けるなんて・・・」

負けたセシリ亞は、少し悲しそうだった。

零斗

「大丈夫だ、あきらめなれば、強くなれる」

セシリ亞

「あきらめなれば・・・ですの?」

そして零斗はにやけ、懐から緑色のドリンクが入ったビーカーを取り出す。

零斗

「負けた人は罰ゲームとしてえ～このマイティドリンクを飲んでもらいます!」

セシリ亞

「ちょっとー?嫌がらせですのー?」

緑色のドリンクに青ざめながらツッコミを入れるセシリ亞。

ハルナ

「あのドリンク、どうやって作ったんだ?」

マイティドリンクに疑問を抱くハルナ。

零斗

「このドリンクの材料は、ゴキブリの死骸十四、ネズミの死骸五匹、腐ったトマト二十個//キサーしたドリンクなの」

これを聞いた生徒達は、「うわあ————！」と叫び、驚きながら引く。

鈴音

「あんなの飲んだら死ぬわよ。」

フランケン

「零斗！そのドリンクヤバいって……。」

フランケンと鈴音は、責めながら零斗にシップ//を入れる。

零斗

「何言ってんだよ、うめえよー健康に良いんだよー。」

篇

「健康に良いらしいが、命が危くなるぞー。」

篇も零斗にシップ//を入れる。

零斗

「あ、でも～飲まなかつた場合はあ～」

するとネロとローラが、セシリ亞の腕を掴み、動けなくする。

セシリア

一 何なんですか！？」

零
斗

「強制的に飲ませます！」

そしてマイティイドリンクを持ち、ヤンデlena目になつたアリスがセシリ亞の前に現れる。

アリス

ふふふふ～零斗のジレンク美味しいよお～

セシリア

「ひい――――勘弁ですわ！勘弁ですわ！」

アリス

「ふふふ、これを飲んで強くなろうねえ！」

セシリア

「いやあ

アリスに無理矢理飲まれ、「うべえうばあ」「ぼぼぼぼ！」と気絶

したのは、言つまでも無い。

零斗

「何だよ～こんな所でおねんねか？まだ夜にもなつてねえぞ」

フランケン

「お前のドリンクのせいで倒れちゃつただろ？が！」

これを見て候補者は青ざめる。

ダイチ

「あれは流石に・・・・・・」

キンジ

「つーかあれ、兵器並にヤバくなえか？」

アリア

「あんなの飲んだら死ぬわよ！」

零斗は候補者の意見をスルーし、進めようとする。

零斗

「それでは、次行つてみよ～！」

たけし／キンジ

たけし

「いけえブルドー！」

ブルドは、ブルドアックスで攻撃し、ズールはそれを防ぐが、体力

は減っていく。

キンジ

初めてなのにやるな、だが・・・・！」

ズールは剣を構え、ブルドは突進する。

ヤンジ

「今だ！必殺ファンクション！」

『アタックファンクション ソーデサイクロン』

そしてズールの地面から巻きしき風が出てくる。

たけし

- 1 -

ズールは回転して竜巻を起こし、近付いたブルドは竜巻の餌食となり、吹っ飛び、戦闘不能となつた。

零斗

「勝者！遠山キンジー——！——！——！」

たけし

「負けちゃつたか・・・・・」

負けたたけしは、少し暗い表情になる。

キンジ

「大丈夫だ、お前も強くなれる」

たけし

「ナハジ・・・・・」

零斗

「それでは！たけし君罰ゲーム決定です！」

そしてマイティードリンクを渡されただけは、それを一気飲みする。

セシリアのようになつてなく、『絶しなが』た。

「あんた、大丈夫なの？」

た
け
し

一大丈夫だ、問題ない」

答えた後、その場で倒れてしまつた。

ダイチ

「たけしい

ダイチは倒れているたけしに駆けつけ、タツヤは涙を流す。

メイメイ

「たけし！しつかりするね！」

メイメイはたけしが倒れている事に気付き、すぐ駆けつけていた。

するとたけしは・・・・・

たけし

「『笛』めん、俺の分まで戦つてくれ、そしてメイメイ、俺はもう先に寝るから・・・・」

メイメイに言い残しながら、目を閉じた。

メイメイ

「たけしーーーー死んじゃ嫌ね！死んじゃ嫌ね！」

涙を流すメイメイであった。

その後、セシリアとたけしは、保健室に運ばれたといつ。

零斗

「さあ次行こひーーー！」

アリア／＼アックス

アリアのクノイチは、アックスのオルテガにコダチで攻撃をするが、かわされる。

クノイチはオートマチックガンに切り替え、オルテガに撃ち、オルテガはギガントアックスを回して弾く。

アリア

「やるわね、あんた」

アックス

「L BXをやって二十日なんだ」

クノイチはコダチに切り替え、オルテガと打ち合つ。

アックス

「すごいね」アリアさん、でも僕の本気はこんなもんじゃないよ！」

『アタックファンクション ジェットハンマー』

ギガントアックスに付いているジェットエンジンを利用して、振り上げてクノイチに叩き切ろうとするが、かわされてしまう。

アリア

「悪いけど、脇が甘いわよ！」

『アタックファンクション 旋風』
（ツムジカゼ）

クノイチはコダチでオルテガを素早く攻撃し、最後はアップバーで吹き飛ばし、オルテガはうまく着地する。

だが、オルテガの体力は、あとわずかだった。

アックス

「脇が甘い？ 残念だけど甘いのは君だよ」

オルテガは素早くクノイチへ向かい、打ち上げてジェットハンマーで叩き落とした。

地面を叩きつけられたクノイチは、戦闘不能となつた。

アリア

「う、嘘でしょ……」

アックス

「惜しかったね」

零斗

「勝者あ——アックス」と、アレックス・ウェスカー……

そしてアリアは、アリスからマイティドリンクを渡されるが、青ざめて見ていた。

アリア

「うわあ、これを飲むのね……」

アリアは覚悟してマイティドリンクを飲んだ……が、「ゴフラー

—————！」と倒れた。

フランケン

「……な、何か、あのドリンクを見たらすりじゃく逃げたくなるような感じがする……」

とフランケンは青ざめながら呟く。

ダイチ VS カリーナ

ダイチ

カリーナ

「私のアマゾネスを倒そだなんて、百年早いですわ！」

ダイチの油断の所為か、または始めたばかりの所為か、カリーナのアマゾネスがダイチのサラマンダーをあつさりと戦闘不能にさせた。

これを見てダイチは啞然とする。

零斗

そしてダイチは逃げようとするが、零斗に捕まつた。

ダイチ

「やあねんだ零オヤジー。」こんな事をしたらい、心うつなのか・・・・」

零斗

「お前は負けたんだ、素直に受け入れろ、でないと……」

ダイチの目の前には、黒い笑みをし、マイティードリンクを持ったエリーがいた。

エリ

「ふふふ～ダイチくん、このドリンク栄養に良いですよ～」

ダイチ

「やめて！ダメだつてえーあ、アア-----」
「-----！」

その後、無理矢理飲まれ、気絶して保健室まで運ばれたのは、言うまでも無い。

タツヤ／＼一刀

タツヤのウォーリアーはブロードソードで一刀のムシャの斬馬刀で打ち合っていた。

ウォーリアーはムシャの攻撃をライトバックラーで防ぎ、ブロードソードでカウンターを『』えた。

そしてムシャの体力が少なくなる。

タツヤ

「ここでファイナルブレイクさせてもらひぜー！」

『アタックファンクション ギロチンカッター』

ウォーリアーは紫の軌道を描きながら大回転で剣を振り下ろし、ムシャは地面に叩きつけられ、戦闘不能となつた。

零斗

「勝者！鹿田タツヤあ-----！」

一刀

「あーあ、負けちゃつた。これ飲めば良いんだろ？」

そして一刀は、マイティドリンクを取つて飲んだ。

全部飲み干し、平然としている事に全員驚く。

キンジ

「嘘だろー？あんな不味いドリンク飲んで平然としてられるなんて
！？」

セラフィム

「あんなクソ不味いドリンク飲んで平然としてられるなんて、バカ
でしようか？」

キンジは驚愕し、セラフィムは毒の混じった咳きをした。

そしてユーは『あれは飲みたくない』と書いてあるメモ帳を表に出す。

一刀

「零斗、言つたら？』のドリンクは苦味を抑えとけって

零斗

「『めん』めん、『キブリの量多すぎた』

一刀

「今度から『氣をつけろよ』

零斗

「ああ分かつたよ」

そう言つて零斗はマイティドリンクを飲み、これを見たフランケン達は一刀と零斗を恐ろしい物見たような目で見る。

フランケン

(ある意味すつじくヤバい・・・・・)

皇牙▽Sライアン

ライアンのグラディエーターと皇牙のカイザーディアンが対峙している。

皇牙

「このLBXはかなりヤバいぞ」

ライアン

「どれくらいやばいのか、ためさせてもいいよー。」

グラディエーターはグラディウスでカイザーディアンに攻撃し、蹴りを入れる。

カイザーディアンは攻撃してくるグラディウスを掴み、グラディウスごと投げる。

そして両手を飛ばす『カイザーナッコオ』でグラディウスにダメージを与え、胸の『K』というアルファベットから宝石らしき物を飛ばす『カイザーバスター』をきます。

グラディウスの体力は、あとわずかになってしまった。

ライアン

「くつ、確かに不味いな」

皇牙

「だから言つたろ?」

カイザーディアンは目の部分から放つ『メーザーアイ』でグラディウスに攻撃するが、かわされる。

ライアン

「皇牙、このLBXにはとつておきがあるんだ」

皇牙

「え?」

ライアン

「喰らえ!必殺ファンクション!」

『アタックファンクション ×ブレイド』

グラディエーターは×字にグラディウスを振り、その衝撃波をカイザーディアンに当てる。

カイザーディアンの体力は、半分になった。

ライアン

「どうだ、これで逆転が出来る!」

しかし、皇牙の慌てる様子が見えない。

皇牙

「残念だが、ファイナルブレイクをせてもうつ、必殺ファンクション！」

『アタックファンクション カイザーサイクロンフィーツ シュ』

カイザーディアンはメーザーアイで攻撃し、パンチ応酬でダメージを『え、カイザーバスターで上空に上げた。

自らグラディエーターまで飛び、回転パンチをぶち当て、グラディエーターは地面に叩きつけられ、戦闘不能になつた。

零斗

「勝者ー王原皇牙あー…………！」

そしてライアンは、グラディエーターを自分の肩に乗せる。

ライアン

「確かに、ヤバかった。けどいつか君に勝つ」

そう言ってマイティドリンクを手に取り、飲んだ。

飲み干した後、気絶する。

倒れたライアンを見て姫子は「ライアン君ーライアン君ー」と駆けつける。

姫子

「酷い、私がなんとかしないと……」

姫子はライアンのベルトを外し、ズボンを脱がそうとするが、簞に

止められる。

姫子

「離して篠ノえさん！ライアン君を助けなきゃならぬのー。」

第

「ダメだー！これ以上越したら大変な事になるー。」

姫子は必死に抵抗するが、第は離さうとしない。

結局、ライアンは保健室に運ばれたといつ。

地中海遺跡のジオラマがロキューブに戻り、零斗はそれを拾つた。

零斗

「では、決勝戦！生き残った俺とキンジとアックスとカリーナとタツヤと皇牙でバトルロワイヤルをしたいと思ひますー。」

そして生徒達は盛り上がる。

零斗は懐からロキューブを取り出し、それを黒板の近くに投げる。

ロキューブは現代都市のジオラマのステージとなつた。

零斗達はそれぞれジオラマの周りの位置についた。

零斗

「じゃあ行くぜ！ホープ！」

ホープはフィールドに移動した。

キンジ

「ズール！」

アックス

「オルテガ！GO！」

カリーナ

「行きますわよ！アマゾネス！」

タツヤ

「行け！ウォーリアー！」

皇牙

「カイザーディアン！」

零斗の以外のL BXがフィールドに移動した。

零斗

「バトル開始！」

合図と共にウォーリアは早速アマゾネスに攻撃する。

カリーナ

「早速攻撃ですの！？」

タツヤ

「バトルロワイアルなんだろ？」

アマゾネスはウォーリアの攻撃をハードバックラーで防ぎ、パル

チサンで攻撃し、ウォーリア―に攻撃のチャンスを許さないかのように攻撃する。

「くつそく防衛できねえ！」

するとカイザー・ディアンに吹き飛ばされたズールが現れ、ホープに吹き飛ばされたオルテガが現れた。

一体とも体力がわざかである。

「行きますわよ！必殺ファンクション！」

『アタックファンクショントライティント』

バルチサンから集まつたエネルギーが出て、ウォーリアードズールとオルテガに向けて左右正面に放ち、三体同時に喰らい、戦闘不能となつた。

タツヤ

「うわあ――――終わったあ――――――――――」

翔子
「たつくん・・・・・」

そして負けた姿を涙目で見る翔子であった。

「覺悟しろよカリーナ」

カイザーディアンはカイザーダブルナックォでアマゾネスにダメージを与え、カイザーバスターを喰らわせた。

アマゾネスは、戦闘不能になった。

残ったホープとカイザーディアンは、対峙していた。

零斗

「さあ、決着をつけようぜ皇牙」

皇牙

「そうだな、零斗」

二体のＬＢＸは同時に走り出し、打ち合つ。

ホープはカイザーディアンの腕を掴み、自分の身に寄せて膝蹴りをし、カイザーディアンはホープの腕を掴み、背負い投げをする。

零斗

「やるな皇牙」

皇牙

「お前もな、零斗」

ホープはバク宙して距離を取る。

その時、カイザーディアンはカイザーダブルナックォを繰り出し、ホープはそれをかわす。

だが、カイザー・ディアンの放つたカイザーバスターを直撃してしまい、体力は半分になつた。

零斗

皇牙

「ああ、お前に話悪いが、終わらせてもらひつー。」

『アタックファンクション カイザーサイクロンフィニッシュ』

カイザーディアンから放つメーザーアイをホープはかわす。

皇
家

零斗

「残念でした！」

『アタックファンクション ダブルバー・シングエッジ』

ホープの持つている双剣の剣身が赤くなり、カイザーディアンに連続切りをする。

怯んだところでアッパーで吹き飛ばし、カイザーディアンは戦闘不

零斗

一勝者、俺え――――――――――――――――――――――――――――――――――――

これを見た生徒達は、青ざめる。

零斗

零斗

こうして、バトルロワイアルに負けた人達は、マイティドリンクを飲み、「オボロロロロロロロ！」と倒れていった。

「これでモハ
雲蓮先生は苦労しなして済むぜ」

そう安心していると、チャイムがなり、零斗は教室の時計に向く。

時計は、十一時になつており、沈黙な空氣になつた。

八話！ 学級委員長をかけたＬＢ×バトル！負けたら罰ゲームね～（後書き）

次回、異種武闘世界大会編を開始します！

零斗

「あ、そうだ。ここで自分の作品のキャラをゲスト出演させたい人は、感想かメッセージをお願いします。締め切りは異種武闘世界大會編の始まりです。それとオリジナルＬＢ×は、異種武闘世界大會編の終わりまで締め切りです」

龍の骨

「それともう一つ付け足しです。オリジナルＬＢ×の必殺技の詳細も忘れないでください。皆様が考えたオリジナルＬＢ×を待つてます」

九話！ 特訓！？ フランケンの必殺技発動！（前書き）

零斗

「今日はフランケンが主役みたいになるぞお～」

フランケン

「主役みたいって……」

零斗

「タイトルの通り、フランケンが必殺技を出しますので、楽しみにしてください」

九話！ 特訓！？ フランケンの必殺技発動！

零斗が委員長が決まって一ヶ月、BSA A学園は夏休みに入った。

異種世界大会はあと十日、零斗達はそれに向けてバトルグランドで特訓をしている。

因みに、ツツコミ役としてフランケンは零斗達の特訓を見る。

フランケン

「俺ツツコミかよー？」

だって、一期ではツツコミを沢山入れてるじゃん。

フランケン

「だからってそれは・・・・」

零斗

「フランケン？ 誰とお話ししてんだ？」

フランケン

「何でもないよ」

零斗はフランケンの様子を見て首を傾げる。

皇牙は破天荒真拳を駆使し、ダイチを圧倒させる。

しかしダイチは氣力で体勢を立て直し、構える。

たけしは一刀と木刀で互いに打ち合つていた。

タツヤは炎を手と足に纏い、サンダバックでジークンダーの鍛錬をし、ソウスケは刀を構え、置いてある木を斬るという居合での鍛錬をしていた。

零斗は皇牙達の特訓からフランケンに向ける。

零斗

「お前も世界大会に出たくないか？ フランケン」

フランケン

「俺は良いよ、フヨンシングは得意だけ世界に向けるレベルじゃないし……」

とフランケンは少しマイナスな発言をし、零斗は手をフランケンの肩に置く。

零斗

「だからこそ特訓をしてんじゃねえか。見ろよ」

フランケンは世界に向けて特訓をしている皇牙達を見る。

零斗

「だからさー、世界に向けて特訓じよ！」

フランケンは零斗の言つ事に頷く。

零斗

「決まりだな、じゃあ俺が見ててやるから準備しちゃよ！」

フランケン

「ああ！」

こうしてフランケンは、零斗と特訓をするのであった。

【イタリア グラン・サッソの黒い教会】

キジュジューで生き残った村人が入っている檻の前にはセスがあり、その後ろでは頭にター・パン巻いて、白い仮面を着けている集団『処星』がいた。

セスは檻から男を出し、処星二人は刀を持って抜刀する。

その様子を傍観するテル達。

男

「お願いです！命だけは、命だけは！――！」

セス

「これはテル様の為だ。悪く思つな」

村人は命乞いをするが、セスは構わず処星に指示をする。

処星は刀を振り上げ、男は逃れるように暴れ、処星達は抑える。

セス

「やれ！」

セスの掛け声で、処星は村人を斬る。

これを見た村人達はわめく。

テル

「セス、もう良いだろ。村人を牢屋に連れて行け」

セス

「しかしそれでは、闇が集まりません」

テル

「こいつらを殺しても、闇が集まらない。明日からは奴隸として使う」

そしてテルは影星達を村人達を牢屋に入れるように指示をし、影星達は村人を檻から出し、牢屋へ連れて行つた。

処星達は、死体を棺桶に入れ、運んだ。

テル

「行くぞ……」

部屋から出て、食堂へ向かつた。

【バトルグランド 組み手の場】

ここは、戦士と戦士同士で組み手をし、己を強くしたり相手と語り合ひ部屋である。

そこに立っているのは一刀とフランケンである。

因みに零斗達は場外におり、審判はソウスケになつてゐる。

ソウスケ

「じゃあ、一刀君とフランケン君の練習試合、開始だよ！」

一刀

「フランケン、お前の得意なフェンシング、零斗の特訓で強くなつたか、見せてもらひうぞ」

フランケン

「そのつもりだよ！」

ソウスケが「両者構えて！」と言つと、フランケンはレイピアを構え、一刀は刀を抜刀して構えた。

ソウスケ

「始め！」

フランケンはレイピアの突き攻撃をし、一刀は刀で防ぐ。

一刀は横切りで攻撃するが、かわされ、縦切りの攻撃に切り替えるが、かわされる。

連続の突き攻撃に押され、場外までギリギリの所まで行つた。

一刀

「零斗の特訓が、生かされているようだな。だつたらこれはどうかな？」

刀を構え、赤いオーラを湧き出し、フランケンは首を傾げる。

そして一刀は縦に振ると衝撃波が生まれ、フランケンに向かっていく。

衝撃波が自分に向かつて来ることに驚き、思わずよけた。

一刀は次々と衝撃波を飛ばし、フランケンはかわし続ける。

「ほらほら～！よけ続けてると疲れるぞ～！」

一刀

「んな事言われたってえ～！！！」

フランケン

衝撃波をかわし続けるフランケンを見て真剣な顔をする零斗。

零斗

「衝撃波をうまくかわしてるな」

皇牙

「だが、一刀の言つ通り。余計体力が消耗する」

ダイチ

「攻めるより、守るほうが体力を使うからな」

フランケンはかわし続け、段々動きが鈍くなっていく。

それでも一刀はやめずに衝撃波を繰り出す。

フランケン

(これじゃあ、余計動きが鈍くなる。まともに受けたら隙が出来てやられてしまつー)

そつ思いながら衝撃波をかわし続け、少しだけ髪がかされる。

すると零斗は立ち上がり、フランケンは零斗に振り向く。

零斗

「フランケン！ よけてばっかしてねえで攻めろ！」

フランケンはこれを聞いて気付き、零斗はサムズアップをする。

そして一刀の方へ振り向いた。

一刀

「話は終わつたか？ ジャ あ続きだ！」

再び衝撃波を繰り出し、フランケンはかわしながら進んで行き、レイピアで衝撃波を弾いていく。

一刀

(弾いたか、これで俺に近付こうとしてんna?)

そつ思いながら一刀は衝撃波を出し続ける。

その時、フランケンのレイピアが青く光り出し、一刀はこれを見た瞬間出すのをやめ、構える。

フランケン

「うおお――――――――――」

レイピアを刺すように突き出し、青い光は矢の様に放たれ、一刀に向かっていく。

一刀

「我流マイティ真拳奥義！紫電いつせ・・・・・」

技を出す途中で青い光が直撃し、壁に叩き付けられた。

これを見たフランケンは驚愕する。

フランケン

「これは・・・・・・・・」

零斗

「良かつたじゃねえか。この技はお前が生み出した技なんだよ」

フランケンに駆け込む、零斗は褒める。

すると一刀は立ち上がり、フランケンに駆け込む。

一刀

「驚いたぜ。あんなに凄い技を出すなんて、他では出来ないぜ？」

フランケン

「零斗、一刀。そして皆」

零斗

「だがな、それではまだまだ世界レベルとは言えないぞ」

これを聞いてフランケンはずつ一けむ。

一刀

「特訓はまだまだ続くぞ。誰か一人、フランケンの相手をする奴は？」

ダイチ

「じゃあ俺がやるよ！」

フランケンの前にダイチが現れ、「俺の相手はどうだ?」とダイチを押して現れるタツヤ。

ダイチ

「おいおい、最初は俺なんだから俺にやらせろよ

タツヤ

「悪いな、スケベで変人なお前にフランケンの相手は勤まらねえよ

ダイチ

「んだとテメエ！……！」

タツヤ

「やんのかー!?」

そしてダイチとタツヤは喧嘩をし始め、たけしが止めに入る。

ソウスケ

「あははは・・・じゃあ僕ならどうだい? 僕は居合いだけど、結構特訓になるとと思うよ」

フランケン

「じゃあソウスケ君、お願ひします！」

フランケンとソウスケは、互いに武器を構え、零斗の合図で始めた。

【イタリア グラン・サッソの黒い教会】

テルは自分の部屋で窓の景色を見て考え方をしていた。

テル

（異種武闘世界大会か、零斗達も参加するだろ？僕も参加したいところだが、長がいなくなれば混乱するだろ？それにやる事があるしな）

すると後ろから、『スーパーロボット対戦OGシリーズ』の『ゼンガーランボルト』を少し若くした男が現れる。

？？？

「武闘大会か、そのBSA学園で噂になっている北郷零斗も参加するのか」

テルは男性の声に後ろを振り向く。

テル

「参加するのか？漸我」

漸我といつ男性は、テルの言葉に頷く。

おまけ

ウヴァ

「うわあ——やめてガメルう———角はコアメダルより大事なも
のなの！」

ガメル

「これでナイフを作れってテル様が言つてた・・・・・」

ガメルという重量系グリードは、ウヴァの角を取るつとしている。

ウヴァ

「俺の角ではナイフ作れないからね！？ってか出来たとしても弱い
から！」

必死に抵抗するウヴァだが、ガメルの力任せに角は折れてしまい、
「ぎゃあ——————！」と断末魔のよ

うに叫んでいたのは、言つまでも無い。

ウヴァ

「俺はオーズの本編で復活したのに・・・・・」

角が折れたショックで滝の様に涙を流すウヴァ。

カザリ

「僕なんか本編では死んでるんだよ！？」

とメタ発言をするウヴァとカザリであった。

異種武闘世界大会まであと、十日・・・・・

九話！特訓！？フランケンの必殺技発動！（後書き）

処星

「外見」

頭にターパンを巻いており、白い仮面を被る。

「プロフィール」

抜刀術を得意とする処刑部隊

零斗

「以上、烈火竜さんが考へてくれた処星でした！それでは、フランケンの必殺技をこの場で決めます！」

フランケン

「え？ どんなの？」

零斗

「必殺技名は・・・・・・『ライトニングソード』です！」

フランケン

「ライトニングソードって・・・・・・良いかな？」

零斗

「次回はなのはと特訓！そして暗黒流星団以外の戦闘員が登場します！」

十話！ なのはと特訓！ソウスケの真拳見せひやこまゆー（前書き）

零斗

「なのはと特訓だわー。」

フランケン

「遂に俺の特訓が・・・・・」

零斗

「それと暗黒流星団以外の戦闘員が登場するわー。」

十話！ なのせと特訓！ソウスケの真拳見せねやこますー！

バトルグランジでは、『組み手の場』でフランケンとソウスケが組み手をしており、零斗達はそれを見守っている。

フランケンはレイピアで突きの攻撃をし、ソウスケは少しだけ刀身を出して受け流す。

零斗

「おお～、フランケンが前より腕が上がったな」

一刀

「ああ、確かに上がつている」

フランケンの戦いを見て評する零斗と一刀。

ソウスケ

「凄いなあ～、前より上がつてるよ。でも・・・・・」

素早く居合に切つをかるようにレイピアを弾き、喉元に向ける。

ソウスケ

「ちょっと甘い所があるよ」

フランケン

「うう・・・・・はい・・・・・」

厳しい一言でフランケンは顔を下げる。

ソウスケ

「そこを直せば、世界に通用するよつになるよ」

フランケン

「分かつたよ」

フランケンは地面に刺さっているレイピアを拾つて鞘に收め、フィールドから降りた。

一刀

「大会まであと九日、それまでに特訓しておかぬきや世界にも通用しない」

皇牙

「そうだな」

皇牙はフィールドに上り、構える。

皇牙

「行くぞ！ソウスケ！手加減はしないぞ！」

ソウスケ

「僕もだよ王原君！」

すると、チャイムらしき音がし、組み手の場のドアが開く。

そこに現れたのは・・・・・

なのは

「ここが、零斗君達が特訓している所なんだ！」

なのはであり、零斗達の所へ行く。

零斗

「おいおい、何でなのはがここに？」

ソウスケ

「ああ、説明をするよ」

ソウスケは、なのはが異種世界武闘大会へ出ると聞き、零斗達が特訓しているバトルグランドで特訓出来ると教え、なのががここに来たと零斗達に説明した。

零斗

「成る程な。だけど大丈夫か？」
「が皆にバレたら大変な事になるんじやないのか？」

ソウスケ

「その辺の所は大丈夫。口外しないようこつて言つておいたから」

零斗

「そつか・・・じゃあなたの手とフランケンで組み手だ」

フランケン

「え！？ちょっと待つてよ！いきなりエース・オブ・エースと組み手えー？」

なのはと組み手をすると聞き、フランケンは驚く。

皇牙

「世界に通用する為には、まず強い相手と戦つんだ」

フランケン

「た、確かにそうだけど……」

零斗

「よしー、やうと決まれば早速組み手だあー！」

フランケン

「うう・・・・」

フランケンとははフィールドに上り、フランケンはレイピアを出して構え、なのははレイジングハートを起動させてバリアジャケットを纏つた。

零斗

「といつ事で、フランケンとはの、組み手を開始したいと思います！」

フランケンはなのはを見て構える。

零斗

「では・・・・始め！……」

なのはの周りに桜色の多重魔力弾が浮き、フランケンに向かっていく。

フランケン

「なっ！」

フランケンは思わず魔力弾をレイピアで弾いた。

だが、魔力弾は出てきてフランケンに向かってこぐ。

フランケン

(僕が押されている……)のままじややうれるのがオチだよ)

フランケンとはの戦いを見てこる零斗達は……

皇牙

「押されているな」

一刀

「このままじや、一回戦で直ぐに負けるな」

皇牙と一刀はフランケンの戦いを見て不安な一顎をする。

フランケンは弾き続けるが、腹と右膝に受ける。

フランケン

「うわあ！」

そのまま右膝を落とし、なのはを見る。

なのは

「どうしたのー・そんなんじややけりやつよー・

右膝にダメージを負いながらも魔力弾を弾き続いているフランケンを見て零斗は立ち上がる。

零斗

「フランケン！カウンターは基本だと教えた筈だぞ！」

フランケン

「え！？」

零斗

「そんなんじゃ一回戦であつさつ負けるのがオチだぞ！」

フランケン

「・・・・・」

フランケンは右膝を上げ、レイピアを構える。

フランケン

「こきますよなのはれん！僕は本氣で行きます！」

なのは

「その意気だよフランケン君！」

魔力弾はフランケンに向かっていき、フランケンは弾きながら走る。

フランケン

「喰らえ！」

レイピアですさまじい突きを繰り出し、なのはは正面に魔方陣を開させて防ぐが、足元がファイールドのギリギリまで押される。

なのは

「うう、凄いよフランケン君。じゃあ私も本氣でいこうかな！」

そしてなのはは『エクシードモード』となり、レイジングハートを構える。

フランケンのレイピアが青く光だし、フランケンは構える。

レイジングハートの先から桃色の魔力の球を生む。

フランケン

「これが、俺の必殺技！ ライトニングソード……！」

なのは

「エクセリオン、バスター……！」

フランケンはレイピアを突き出し、青い光を放ち、なのはは桃色の砲撃を放つ。

青い光は桃色の砲撃とぶつかり合つ。

なのは

「くう……！」

フランケン

「うおお――いけえ――――――――――！」

青い光は桃色の砲撃を押し出してなのはをフィールド外まで直撃した。

フランケン

「・・・・・・・」

なのは
「す、凄いよフランケン君」

なのははレイジングハートを杖にして立ち上がり、フランケンを見る。

一刀は立ち上がり、フィールドに上がる。

一刀

「良く頑張った。だが、世界にはなのはよりもっと強い奴がいる。それを忘れずに」

フランケン

「分かった！」

ソウスケ

「基本のカウンターから逆転を狙つたといつのは良かったよー。」

フランケン

「ありがとう！」

零斗

「よつしゃー」という事で、フランケンは逆転を狙つたといつ事で、俺とフランケンが組み手をするぜえ！」

フランケン

「ちよつと零斗ー？」

皇牙

「そりだな。なんなら、俺との組み手でも構わないが

零斗

「よつしゃーじゅあ早速、組み手開始だあ————！」

その頃、暗黒流星団は・・・・・

テル

「何？交戦中？」

影星

「そのようでござります。バトルグランドへ行く途中、謎の戦闘員に接触してしまってしまい、交戦状態になつております」

テルはテーブルに置いてある水晶玉に向かい、手を水晶玉に当てる。

すると影星達が『仮面ライダーアクセル』に登場したコマンダードーパントの分身体に酷似した一つ目で無機質なフェイスと防弾チョッキを模したライダースーツ人間に近い外見をし、白黒で統一されている集団と戦っていた。

テル

「・・・・・」

影星

「テル様！？」

テル

テルはこれを見て黙つて出口へ向かつた。

(あれはソルジャーードーパント。作るとなったら、あの会社しかない)

場所を戻し、バトルグランドでは・・・・・

零斗

「ん~! 特訓した汗を流すのは気持ち良いよな~!~!~!~!~!~!~!

零斗は伸びをしているが、フランケンは息が上がっていた。

フランケン

「零斗・・・・・」それが世界に向けての特訓か・・・・・

ソウスケ

「やうだよ。どの武闘家もいつこう鍛錬もしてるんだよ」

フランケン

「そ、そうだったんだ・・・・・」

零斗

「さて・・・・今回はこれでおしまい一家に帰つて身体を休め――――

ひつて零斗達はバトルグランドから出て家に帰つとした。

その時・・・・・

田の前にソルジャーードーパントが現れ、零斗達は警戒する。

零斗

「何だお前等は!~!~!~!~!~!~!~!

ソルジャーードーパント

「北郷零斗だな？」

零斗

「俺の事か？ そりだが」

ソルジャーードーパント

「ならば・・・・・」

ソルジャーードーパント達は特殊ロッドを取り出し、構える。

零斗

「やるつてのか？ 上等ー！」

フランケン

「あのさ、零斗。それで戦うの？」

零斗

「ああ、超伝説の肩たたき機セイバーでな

フランケン

「それただの肩たたき機じやんー！」

肩たたき機セイバー？を持つていてる零斗にシツツ「!!」を入れるフランケン。

零斗

「さあ行くぜー！」

五人で襲い掛かってくるソルジャーードーパントに、零斗は走り出しき。

間を抜いた。

フランケン

な、何だつたんだ！？」

一
刀

皇牙

ソウズケ

卷之三

ソルジオーデーバント達

「ああ！バカなあ！」

ソルジヤードー、パンツ達は股間を抑えながら悶え、倒れた。

零斗

一
刀

「こ、この技は肩たたき機セイバーを用いて目にも止まらぬ速さで股間を狙い、相手を抜く伝説の技！」

なのには

「ええ！？」

フランケン

「すんごく嫌な技だあ————！」

なのはは一刀の解説に顔を赤くし、
フランケンは思わず叫ぶ。

零斗

「わあ、お前等ー、いぐわー、」

フランケン

「じゃあ、行くつかー！」

ソウスケ

「ああ、ちょっと待つて！この大群、僕にやらせてくれないかな？」

「ええ！？」

皇牙

「あれをか！？」

これを聞いたのはと皇牙は驚く。

零斗

「いいだろ、つー」

一
刀

「おーい！」

フランケン
「此このかよー?」

「良二のかよー?」

零斗

「ソウスケには真拳があるんだよ。その披露を見てやる!」

そしてソウスケは居合の構えをする。

ソウスケ

「行くよ!」

刀を鞘に収めると、十体のソルジャーードーパントは一斉に倒れた。

襲い掛かってくる十体のソルジャーードーパントに、居合で切りをする

ように走り抜いた。

刀を鞘に収めると、十体のソルジャーードーパントは一斉に倒れた。

フランケン

「ええ!…?どうなってんの!…?」

何があつたか分からなく、フランケンは驚きを隠せなかつた。

ソウスケ

「ソニック真拳・・・・・」

フランケン

「ソニック真拳!…?」

ソウスケ

「これは、僕が速さを求め、居合を極めて作られた真拳。簡単に言えば、スピードと居合を合わせた真拳と呼ぶね」

なのほ

「これが、ソウスケ君の真拳……」

フランケン
(そうなのか……そんな凄い真拳を持つてたなんて初めて知つた)

なのはとフランケンはソウスケの真拳に驚きを隠せずにいた。

ソウスケ

「そしてさつあやつたのは、ソニック真拳奥義、ソニックブレード」

ソウスケは再び居合の構えをする。

ソルジャーードーパント

「ふざけるな！我々をたつた一人で相手するなど、笑わせる！」

ソルジャーードーパント達は一斉にソウスケに襲い掛かるが……

ソウスケ

「ふふふふ、ソニック真拳奥義……」

目にも止まりぬ速さ剣を振り回しながらソルジャーードーパント達へ突っ込む。

ソルジャーードーパント達を抜いた後、刀を鞘に収めた。

ソウスケ
「モーレツソニック！」

後ろにいるソルジャー・ドーパント達は一斉に倒れた。

フランケン

「す、凄い！」

零斗

「どうだつた？ソウスケのソニック真拳は？楽しめたかい？」

ソウスケ

「大会が楽しみだな～」

こりして零斗とフランケンは一刀と皇牙とソウスケとなのはと別れた。

フランケン

「さつきの奴等、一体何者なんだらう～..」

零斗

「ああ、テルの所の奴等じゃないって事は確かだ」

零斗とフランケンはソルジャー・ドーパントが来た事に疑問を抱いていた。

零斗

「けどよ、暗黒流星団の他に俺を狙う奴等がいるんじゃねえかと思うんだよな～」

フランケン

「・・・」

その後、零斗とフランケンは別れた。

大会まであと九日・・・

十話！ なのはと特訓！ソウスケの真拳見せちゃいます！（後書き）

ソルジャーードーパント

武器 特殊ロッド（状況に応じて高圧電流 高熱、冷気を流す事が可能）

『兵士』の記憶が込められたガイアメモリに変身する下級ドーパント。

『シネマ『仮面ライダーアクセル』で登場したコマンダードーパントの分身体のコマンドに酷似した、一つ目で無機質なフェイスと防弾チョッキを模したようなライダースーツを纏つた人間に近い外見をしているが、ボディの色は白黒で統一している。

Wで登場したマスカレイドドーパント同様に特殊能力を持たず、通常の武器の他、戦い慣れした人物の格闘でも倒せ、倒されるとメモリブレイクせずに消滅する。

零斗

「以上！『char』さんからの戦闘員でした！そして次回は！ニヤンダフルパティショとうさぎんアイドルとグラビティガンナーが暗黒流星団の刺客として登場！劉備先生と曹操先生と共に3ストライクのデスマッチで対決だ！次回！『激闘！？3ストライクの勝負は上等じゃない！』」

フランケン

「ど、どうなるんだー！？」

激闘！～3ストライクの勝負は上等じゃー～（前書き）

零斗

「今日は、クイーンズゲイトのキャラが登場するわー。」

フランケン

「嫌な予感が……」

激闘！？3ストライクの勝負は上等じゃない！

新宿の公園では、零斗と劉備ガンダムと曹操ガンダムとフランケンの四人でラムネジュースを飲んでいた。

零斗

「やっぱ良いね～ラムネジュースは」

劉備ガンダム

「ホントだなあ～」

曹操ガンダム

「ついでにカレーパンも欲しいよねえ～」

フランケン

「あの～ラムネにカレーパンって合うんですか？ってか欲しいって・・・」

曹操ガンダム

「激辛の物で・・・」

フランケン

「合いませんつてそれ！激辛カレーパンとラムネは合いませんつて！」

激辛カレーパンとラムネは合わないと曹操ガンダムにツッコミを入れた。

零斗

「それよつと。つまんないね～、最近暗黒流星団の動きが無くて

フランケン

「何言つてんだよ。だからこそ油断しちゃダメなんだよ。それに、昨日の奴等も零斗を狙つて来ていたし」

零斗

「それもそりだよな～」

そう言つて零斗はラムネジュースのビンを「///」箱に捨て、劉備ガンダム達も捨てた。

すると・・・・・

？？？

「あいつが北郷零斗ね」

？？？2

「確か金山企業を滅ぼしたマイティ真拳使いです～」

？？？3

「ホントやな～」

田の前に三人の少女が現れ、零斗達は止まる。

零斗

「何だ！てめえ等は！」

？？？

「あたしは一ヤンダフルパーティシエのアリュッタ＝カトウス！」

？？？2

「うさぎさんアイドルのルーナですかー。」

？？？3

「ひばはグラビティガンナーのアイン

劉備ガンダム

「なんだよおめえ、うーちゃんのかゴラアー。」

リーゼントとヤンキー姿の劉備ガンダムが喧嘩を売るような事を言つていた。

アリュッタ

「あんたに頼みたい事があるんだけど」

零斗

「頼みい？何だ！」

アリュッタ

「あたしの為に、倒されなさい。」

フランケン

「ええ！？」

これを聞いたフランケンは驚き、零斗は舌を鳴らす。

零斗

「お前の為に？ふざけんな。ほこりですかと、やられた俺じやねえよ

アリュッタ

「やつ、なれば力づくでも倒してやるわー！」

劉備ガンダム

「上等だ」ゴラアー！かかつて来いよおー！」

フランケン

「まだ着てたのー？」

劉備ガンダムがまだリーゼントとヤンキー姿になつてゐる事にツッコミを入れた。

零斗

「なあ、じつじよウゼーー！」

ルーナ

「何をじつじよウゼーなんですかー？」

零斗

「三対三のバスマッチ、3ストライクで勝負をつけられてのは

アイネ

「3ストライクってなんなん？」

3ストライクとは、三人一組に組んで戦うバスマッチである。

主に、真拳使いがこれで戦っている事が多いとか。

アリュッタ

「ふうん、じゃあ一度いいじゃない！」

零斗

「じゃあ、俺は劉備先生と曹操先生で行く。フランケン！ ツツツツ！」
役を頼む！」

フランケン

（結局こうなるんだね……）

零斗

「よし！ それじゃあバトル開始だ！」

零斗の掛け声により、バトルが開始された。

「まずは俺からだあ————！」と零斗はハエ叩きでアリュッタに攻撃を仕掛け、アリュッタは右腕に着けているニヤントレットで防ぐ。

アリュッタ

「何でハエ叩きーー？」

零斗

「ぐつー！ ダメか！ 妖刀ハエ叩きではー！」

アイネ

「妖刀ハエ叩きってまんまやないか！」

横からアイネがツツツツを入れた。

アリュッタ

「つてか離れなさいよ。」

「ヤントレッシュで押し返し、零斗は着地する。

零斗

「ハリなったらいマイティ真拳奥義。ゴロゴロアタマ――ツク！」
「――」

身体を横にして転がってアリュッタに突進する。

アリュッタ

「鬱陶しいわあ！」

零斗

「あやば――――！」

が、鬱陶しにイライラしたアリュッタに蹴飛ばされた。

一方劉備ガンダムは・・・・・

劉備ガンダム

「うわあ――――――！」

ルーナ

「ハリハリ～」

ルーナが放つにんじんミサイルを喰らつたら、俺がどうなるか分かつた。

劉備ガンダム

「バカあ！にんじんミサイルを喰らつたら、俺がどうなるか分かつた。

てんのかよ！？」

ルーナ

「そんなの知らないです！」

にんじんミサイルが劉備ガンダムに集中攻撃し、劉備ガンダムは「ギヤアア――人参になるう――――――」と叫んだ。

フランケン

「劉備先生え――――――――――！」

煙が晴れると、劉備ガンダムは人参になつていた。

劉備ガンダム

「いててて」

フランケン

「人参になつてるう――――――――――！」

劉備ガンダム

「いやあ危なかつたぜ。もう少しで人参になるところだつたぜ」

フランケン

「いやいやいやいや人参になつてますよ！？」

劉備ガンダム

「あ！俺人参になつてる！」

劉備ガンダムは自分が人参になつてゐる事に気付いた。

曹操ガンダムは・・・・・

曹操ガンダム

「…………余のかレー・パンを食ええ…………！」

両手にカレーパンを持つてアイネのグラビティマグナムをかわして
いた。

アイネ

הנְּבָאָה

ノイイズ

曹操ガソダム

アイネのグラビティマグナムを喰らい、曹操ガンダムは悶える。

零斗

劉備ガンダム

「何なんだ？あの強さは？」

曹操ガンダム

「余のカレーパンを食べてくれなかつた・・・・・」

アリコツタ

「マイティ真拳つてこの程度?」

アイネ

「大したこと無いやな~」

零斗

「マイティ真拳がこの程度? 見縊るなよお前等、マイティ真拳というのは無限の可能性があるんだ」

アイネ

「その無限の可能性、本当にあるのか?」

零斗

「あるぜ。嘘だといつのなり見せてやるよー。」

そして零斗は白いオーラを出し、腰を落とし、両手首を合わせて構える。

零斗

「マイティ真拳奥義・・・・・」

電気が集中し、だんだん大きくなる。

零斗

「マイティ
電撃聖自在波! ! ! !」

電気の球を放ち、アリコツタ達は吹き飛ばされる。

零斗

「マイティ真拳の可能性、思い知つたか！」

アリュッタ

「くつ・・・確かに凄いわね・・・」

零斗

「後アリュッタ！お前、男が嫌いらしいな」

アリュッタ

「そうよー男が嫌いなのよ！つて何で知つてんのよー！」

零斗

「マイティ真拳奥義、サーチアイで分析したぜ」

アリュッタ

「にやつ！勝手に分析しないでよー！」

零斗

「そしてついでにお前らも分析させてもらつた」

ルーナ

「ええ！」

アイネ

「分析つて・・・・・」

零斗に分析されたのか、ルーナ達は動搖する。

零斗

「曹操先生、俺の作戦に乗つてくれますか？」

曹操ガンダム

「ああ、お前の作戦、教えてくれ！」

零斗

「これですよ」

零斗は懐から『俺の作戦』と書かれた本を取り出し、曹操ガンダムに渡す。

曹操ガンダムはその本を開く。

曹操ガンダム

「1・曹操先生を圈に使う。2・曹操先生」と攻撃して見捨てる。
以上・・・・・」

これを見た曹操ガンダムは畠然とし、「ふざけるなあ――――――！」と地面に叩きつける。

しかし、零斗に頭を掴まれ、「作戦開始――――――――！」と投げ飛ばされる。

零斗

「行くぞお――――――――！」

零斗と劉備ガンダムはバズーカとマシンガンで曹操ガンダム「」とアイネ達に攻撃し、煙が上がる。

フランケン

「おここ――――――――――お前等やめりや――――曹操先生が死
んじやうだらぬ――――――――――」

そんな零斗達にツッコミを入れるフランケン。

煙が晴れると、アイネ達は倒れており、曹操ガンダムは立っていた。

アランケン

曹操ガンダムが無事と分かり、フランケンはホッとするが、「まだ生きてたのかあ――――――！」と零斗がバズーカで曹操ガンダムを攻撃する。

アリュッタ

「くつ・・・なんて無茶苦茶な奴等なのー?」

ルーナ

「ハジケ過ぎというか・・・・・」

アイネ

「常識破つやう・・・・・」

零斗達の攻撃を受け、アイネ達は立つ。

零斗

「やあ、マイティ真拳の真髓はここからだ！」

アイネはグラビティマグナムの弾を足元の周りに撃ち、自分の周りに赤いフィールドを展開させる。

すると地面に撃つていた弾が浮いた。

「その真髄とやらを、見せてもらいますえ！ オクタブルバレッジ！」

赤いフィールドから青いフィールドに変わり、弾は零斗に向かっていく。

零斗

劉備ガンダム

「うわあバカあ――――――――！」

零斗は劉備ガンダムを盾にしてアイネのオクタブルバレットから守

零斗

「そしてそのまま劉備先生マグナム！」

劉備ガンダム

「ギヤア――――――――!」

劉備がンダムを殴り飛ばし、アイネがかわしたことにより電柱に激

突する。

零斗

「 よくも劉備先生をお―――絶対に許さあ―――ん―――」

アイネ

「 いやあんたやろ―――つちは関係ないで―――」

アリュッタ

「 これでも喰らいなわ―――」

曹操ガンダム

「 ギヤア――――――――――」

アリュッタのニヤンダーウィップに捕らえられた曹操ガンダムは電流を流されて痺れている。

ルーナ

「 ほらほら――やられちやうよ――」

劉備ガンダム

「 うわあ――――――――――」

ルーナのマイク攻撃に劉備ガンダムは悶えている。

劉備ガンダム

「 つてやられていろぜえ――――――――――」

ルーナ

「 キヤアアアアア――――――――――」

劉備ガンダムはルーナに無数のパンチを浴びせ、アッパーを喰らわした。

そしてそのまま倒れ、気絶した。

アイネ

「ルーナ！？」

ルーナ、脱落。

アイネ

「くつ、よくもルーナを・・・・」

零斗

「まず一人。これからお前等にマイティ真拳超絶奥義いーーマイティ真拳の恐ろしさを教えてやる」

アリュッタ

「恐ろしさですってーー？」

零斗

「いぐぞーーマイティ真拳超絶奥義いーーマイティ超常現象5ーー！」

アイネ
「超常現象ーー？」

零斗

「お前等に五つの超常現象を受けてもらひーーまずはこれだあーー」

周りがお花畠になり、アリュッタとアイネは困惑する。

後ろを振り向くと・・・・・

進鶴

「よつ・・・・・」

ハスナ

「嫉妬のオーラを感じてここにきました」

激情態の進鶴と狂獸態のハスナがいた。

フランケン

「恐ろしいのが来たあ――――――――――――――――

これを見たアリュッタとアイネは青ざめる。

零斗

「超常現象の一つ目は、激情態と狂獸態のお二人組みだぜえ――――

進鶴

「覚悟しとけよ」

ハスナ

「ええ、特にアリュッタさん」

アリュッタ

「い、いやあ――――――――――

アイネ

「勘弁やあ――――――――!」

逃げ出す一人と進禰とハスナが追いかける。

アリュッタ アイネ

「――いやあ――――――――!」

二人はどうなつたか、ご想像にお任せします。

零斗

「さあ、二つ目だ! 二つ目は・・・・・」

ボロボロ姿のアリュッタとアイネは空を見ると、無数の隕石が降つた来た事に驚く。

アイネ

「いやあ――――――――!」

アリュッタ

「やめてえ――――――――!」

隕石はアリュッタとアイネに集中して降つてくる。

零斗

「二つ目は、隕石落_下!――!」

フランケン

「うわあ、怖い・・・・・」

零斗

「さあ二三つ田はあ・・・・・・」

アリュッタ

「ん?・・・・ええ――――――――――――」

向こうから双角鬼の大群が走ってくる所を見てアリュッタは驚愕する。

そしてそのままアリュッタとアイネを吹き飛ばした。

零斗

「三つ田は、双角鬼達の突進!!--」

フランケン

「それ一期でやつてたよね!-?」

フランケンは三つの田の超常現象は一期でやつたヒツジ「ハリ」を入れた。

零斗

「オラオラオラオラ!-!まだ一つ残ってるだー!」

アリュッタ

「も、もう勘弁して・・・・・・」

零斗の隣に、サービスマンがおり、アイネとアリュッタは青ざめる。

サービスマンは「サービスマニース!-!」と叫んで布を捲り、アイネとアリュッタは青ざめながら手で田を防いだ。

零斗

「四つ田は、サービスマン……」「

フランケン

「すんごく嫌な超常現象だあ…………」

零斗

「さあ、五つ田の超常現象だ。覚悟しろ…………」

アリュッタ

「いや、私達帰ります…………」

アイネ

「あなたのマイティ真拳の恐ろしさも分かつたし…………」

そして二人は帰ろうとするが…………

零斗

「どうか、ならば五つ田の超常現象を受けてから帰れ」

「えー？」と一人は振り向き、零斗は白いオーラを漂わせている。

零斗

「五つ田はあ…………」

走つてくる零斗に「来ないでえ————」と涙田になるアリュッタとアイネ。

アリュッタ アイネ

「いやあ————」「————」

零斗

「マイティ真拳奥義！聖自在昇竜！」

聖自在昇竜で吹き飛ばした零斗は着地し、アリュッタとアイネはそのまま地面に叩きつけられた。

零斗

「マイティ真拳の恐ろしさ、思い知つたか！」

こうして、アリュッタとアイネとルーナに勝利した零斗達は、それぞれ家に帰つていた。

その頃、暗黒流星団は・・・・・

テル

「零斗、まさかここまで強くなつてゐるとはな

水晶玉で零斗達とアリュッタ達が戦つてゐる所を見ていた。

ウヴァ

「どうするんだ？」

テル

「決まつてゐる、大会に参加する」

ウヴァ

「だが、リーダーはお前だぞ。その指揮をどうするんだ？」

テル

「その時は、お前に任せる」

テルは部屋から出ていった。

テル

（これは楽しみだな。零斗、お前と戦つのが楽しみになってしまった）
怪しい笑みを浮かべながら零斗との対戦を楽しみにしているテルド
あつた。

激闘！？3ストライクの勝負は上等じゃないー（後書き）

零斗

「ふう～あの三人、結構やるな」

フランケン

「つてか、零斗の所為でトーリウマが・・・・」

零斗

「おっ！次回は俺の後輩が来るぜ！次回！』『真拳六兄弟！つて俺の後輩！？』

フランケン

「どんな後輩なんだ！？』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7659s/>

三学年だよっ！BSAA学園！

2011年11月23日13時53分発行